

「いや、皆さんのおかげで助かりました  
いつも雑務を手伝っていただいて  
ありがとうございます」

「いえ、そんな」

「教頭先生を手伝うと良いことあるしね  
あ、疲れたな、疲れた疲れた」

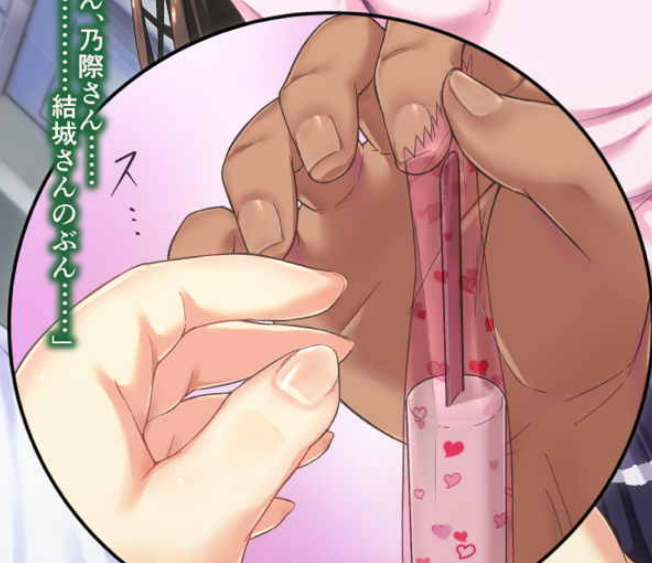
「も、行儀悪いよ」

「ふふふ、かまいませんよ  
では、いつもの褒美ということで  
他の皆さんにはナイショですよ」

「は〜」

「はい、小暮さん、乃際さん……  
そしてこれが……結城さんのぶん……」

「ありがとうございます」



「今運んでたのって何の授業で使うんですか」

「来月にある保健体育の授業で、男子の方が私が担当することになりました。その準備を」

「あ、男子と女子で別々なんだっけ」

「男子のほうはどんなことやるんですか」

「そちらと同じく模型を使ったものです。強いていうなら相手を想いやることの大切さを教えるくらいですかね」

「な、なんだ、もつとえっちなことでも教えるのかと思ったね、美柑ちゃん」

「な、なんで私に振るの？」

「だって、お兄ちゃんを誘惑するアレとかコレとか知りたいんじゃないかと思って」

「そ、そんなの全然知りたくないから」





「ほ、お兄さんと仲が良いんですね」

「いつもお兄ちゃんの話してるんですよ」

「たしか、結城さんのご家庭は  
ご両親がともにお忙しいとか  
なるほどご兄妹で支えあっているんですね」

「そんな大げさな……  
まあ家事とか分担したりしますが」

「大好きに小菅くん……  
他にも数多くの男子をフリ続けているのも  
お兄ちゃんのが好きだからなんですよ」

「まだ言ってる……」

「小暮さん、悪ノリもそのへんで  
結城さんもしご家庭のこと  
何かあったら相談してくださいね  
放課後は指導室でカウンセリングも  
行っていますから」

「え、あ、はい……」



「ん……」

（今日も……オナニーしちゃってる  
サチもママもたまにするって言うってだけで  
ほぼ毎日なんて……）

「あ……、そこも気持ち良……」

（でも、アソコがムズムズしてきたら  
オナニーしないと治まらないし……）

「ん、お豆さん、優しく……  
ん、いいよお……それ……良い……」

（ああもう……  
昼間みんなから言われたからかな）

「うごよ、リトお……」

（今日はやけにリトの顔が思い浮かんで  
こんなの、兄妹なのに……  
ぜったいおかしいよ……）

はあ

んっ

どく

んっ



「保健の授業……か」

(ほ、ほんとに男の人の  
おち……アレが……  
ここに入っちゃうのかな)

「リトの……、痛っ……」

(なんだろう  
この……ぶよぶよ……  
強めに触ると痛いし……  
ちよつとコワイ)

「ん、胸も、乳首も触って……」  
「一緒にアソコも……」

(あ、これ良い……  
イきそう、イっちゃいそう……)

「あ……リト……お兄ちゃ  
ん、はあああ……ッ！」

「はあ、はあ、はあ……」

(でも、兄妹じゃ  
セックスしちゃいけないんだよね……)



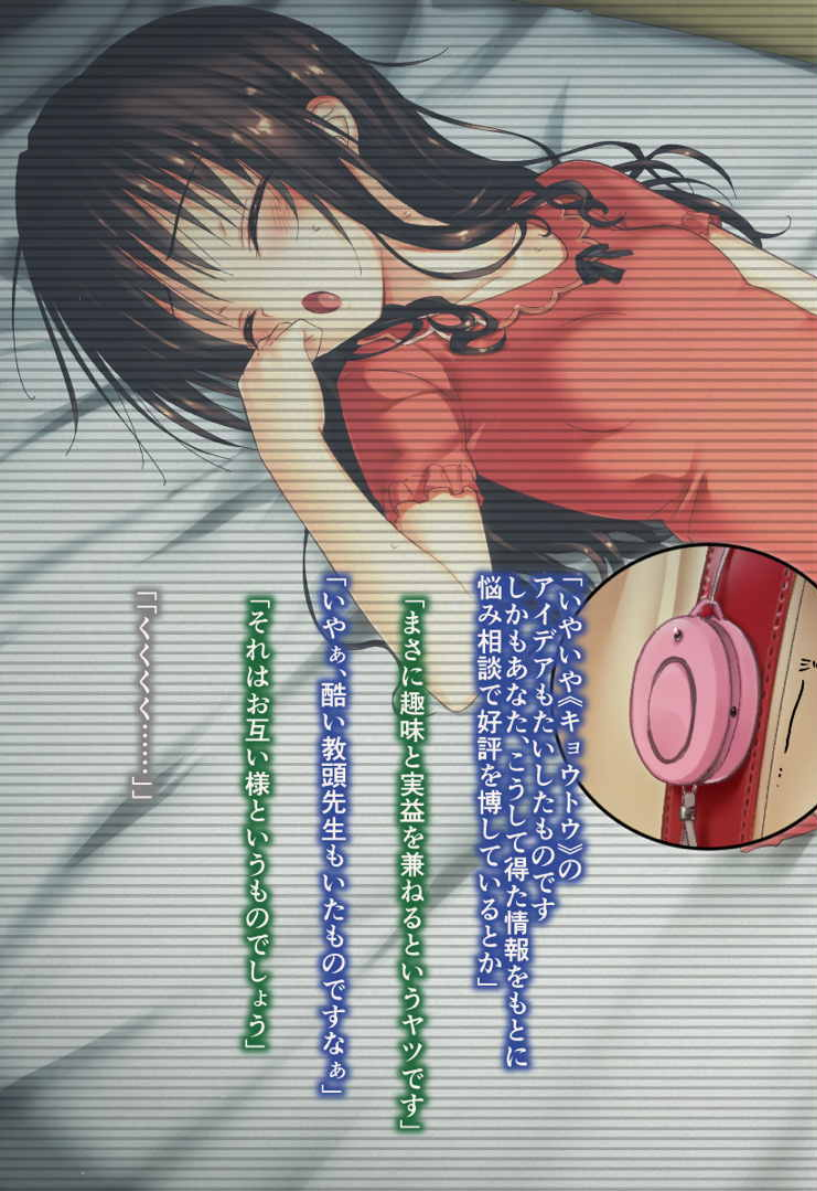
「媚薬入りアイスはちゃんと効いてるようですね」



「おお、《コウチヨウ》さん……  
おかげさまで、首尾は上々です」

「これは例のカメラの映像で？  
なかなか綺麗に映ってますな」

「ええ、学校で配布した防犯ブザーに  
仕込んだカメラからのものです  
これもあなたからの援助があつてのこと  
感謝していますよ」



「いやいや《キョウトウ》の  
アイデアもたいしたものですよ  
しかもあなた、こうして得た情報をもとに  
悩み相談で好評を博しているとか」

「まさに趣味と実益を兼ねるというヤツです」

「いやあ、酷い教頭先生もいたものですねあ」

「それはお互い様というものでしょう」

「~~~~~」





「そこはやはり教育者として  
導いてあげたいものですねえ  
真に身も心も委ねられる恋愛とはいかなるものか  
ああ、美柑ちゃんにいろいろ教えてあげたい」

「これはこれは  
近親者への恋慕にも似た傾倒は  
この年頃の子には珍しくもないことですが」

『お兄ちゃん……』

「それが今では、下は全部脱いでしまえますし  
具体的な相手をイメージしていることも……」



「初めは自分が欲情していることも  
よく分からなかったんでしような  
触り方も服の上から恐る恐るといった感じで」

「ほほお、過去の映像も見られるのですな」

「帰宅してから効果が出るよう  
遅効性の媚薬を使って一ヶ月ほどでしょうが  
最初のころは……こんな感じで」

「初々しいですな」



カチ……  
カチ……



「……………お尻だけですよ  
あと私にもヤミちゃんのお尻を……………」

（食い気味で！ しかもその顔！  
知らんぷりを通り越して  
質問の意味すら  
理解すらしないというこの顔！）



「しかし羨ましいですなあ  
彼女はわしも目をつけてたのになあ……………」

「……………そんなこといってもダメですからね  
私のテリトリーの娘でしょ」

「えー、そんなこと言わないで、ね、ね」

「じゃ、あなたのテリトリーの娘  
ヤミちゃんでしたっけ

あの娘の女路こどもー」  
「何を言っとなるんだね君は？」





「まったく、学校は最高だぜ……」

「そうやって授業中に発情させて……」

「縦笛に体操着、給食で持参した箸にでも……いや、静まりかえった教室で媚薬を仕込むのはいくつになっても楽しいですよ〜」

「あゝ、学校は楽ですよ〜、教室が空になるタイミングがいくらでもありますし媚薬を仕込む場所も……」



「さっすがキョウトウ、話が分かるで、いつ随とすんです？明日？明後日？」

「……そ、そうですね、まずは学校で良を張りましょうかね」



「すみません、こんな格好で……」

「いえいえ、授業が終わってすぐに呼びだしたのは私ですから」

「それで、あの……」

「頭の良い結城さんならなぜ呼び出されたのかもう分かっているのでは」

「……」

「最近は何となく物騒でしてね  
校内には防犯カメラが設置してあるのですよ  
これは先ほど撮影されたものですが……」

「あ……」

「授業中に抜けだして自慰行為とは……」

「いけないことだっただって分かってたんです  
でもどうしても我慢……できなくて……  
私……」





「まあまあ落ち着いてください  
媚や……お茶でも飲んで……」

「はく……」

「結城さんくらいの年頃の子が性的なことに  
興味を持つのは自然なことです」

ズネ……

「ただ、さすがにこの言葉は……」

「お兄ちゃん……」

「看過できませんね  
実のお兄さんと  
そんな関係になつていたとは……」

「ちょ、ちよつと待つてください  
誤解です！ それは、私が勝手に……」

「ご両親に報告して、別居させるなり  
早急に対応していただかないと……」

「そんな……」



ソコ...

あんど...

はっ...

イイかも

リト...

「にわかには信じられませんが...うゝむでは、ひとつこの場で確認させてください結果次第ではこの件は保留することになります」

「どうしたら良いんですか!?!」

「処女かどうかを確認させてください」



「良いよお...リト...そこもっと強くしてえ」

「まったく、お兄さんにも聞いただす必要がありますねこれは」

「聞いてください! クマッ  
それはその、私が妄想してるだけで  
本当にリト...兄とは何もないんです」

「では誰にも教わらず  
一人でするうちにこんなにスケベになったと?」



「授業では教えませんが  
膣には処女膜というものがあるのです  
セックスしていないならそれが残っているはず」

「ええ!?  
それって、アソコ……を  
先生に見せるってことですか……?」

「嘘をついていないか調べるには  
それしかありません  
なに、医者に診られるようなものですよ」  
「でも……」

「身の潔白をここで証明できないのなら  
やはり、ご両親に連絡を……  
いや、その前にお兄さんに聞いたただすとか」

「待ってください!  
わ、分かり……ました……」

「では、足を持ち上げてください」

「は……」





「すみません、こんな格好で……」

「いえいえ、授業が終わってすぐに呼び出したのは私ですから」

「それで、あの……」

「頭の良い結城さんならなぜ呼び出されたのかもう分かっているのでは」

「……」

「最近は何となく物騒でしてね  
校内には防犯カメラが設置してあるのですよ  
これは先ほど撮影されたものですが……」

「あ……」

「授業中に抜けだして自慰行為とは……」

「いけないことだっただって分かってたんです  
でもどうしても我慢……できなくて……  
私……」





「まあまあ落ち着いてください  
媚や……お茶でも飲んで……」

「はく……」

「結城さんくらいの年頃の子が性的なことに  
興味を持つのは自然なことです」

ズネ……

「ただ、さすがにこの言葉は……」

「お兄ちゃん……」

「看過できませんね  
実のお兄さんと  
そんな関係になつていたとは……」

「ちょ、ちよつと待つてください  
誤解です！ それは、私が勝手に……」

「ご両親に報告して、別居させるなり  
早急に対応していただかないと……」

「そんな……」



ソコ...

あんど...

「はっ」

「処女かどうかを確認させてください」

「どうしたら良いんですか!?!」

「にわかには信じられませんが...うゝむでは、ひとつこの場で確認させてください結果次第ではこの件は保留させていただきます」

イイかも

「そ、そうです...」

リト...

「では誰にも教わらず一人でするうちにこんなにスケベになったと?」

クマッ

「聞いてください!それはその私が妄想してるだけで本当にリト...兄とは何もないんです」



「良いよお...リト...そこもっと強くしてえ」

「まったく、お兄さんにも聞いただす必要がありますねこれは」



「授業では教えませんが、  
膣には処女膜というものがあるのです  
セックスしていないならそれが残っているはず」

「ええ!?」  
「ふる いる  
それって、アソコ……を  
先生に見せるってことですか……?」

「嘘をついていないか調べるには  
それしかありません  
なに、医者に診られるようなものですよ」

「でも……」

「身の潔白をここで証明できないのなら  
やはり、ご両親に連絡を……  
いや、その前にお兄さんに聞いたただすとか」

「待ってください!  
わ、分かり……ました……」

「では、足を持ち上げてください」

「は……」



(なんでこんなことに……  
だけど悪いのは私……だよな  
でもでも、は、恥ずかしいよ……)

「もうすこし広げてください」

「ッ」

「本当にお兄さんとは  
セックスしていいのですか  
例えば無闇に身体を触られたりは？」

「さ、触られたりとかですか  
その……兄が転んだとき偶然……  
とかなら……」

「意図してやっってる恐れはないですか」

「そ、それはないと思います……」

(これって、私のせいで  
リトも疑われてるってことだよな  
ああもう、どうしたら……)

「では、股間の部分をズラしますよ」



「うう……  
な、なんか変なズラし方してませんか」

「この方がアソコを開きやすいんですよ  
それより、もっと力を抜かないと  
奥まで見えませんよ」

「ッ……  
そ、そんなの無理……です……」

「ふ……」

「ひゃん……ッ!!  
ちよ、あの……息、かかっています」

「しかし近づかないと確認できませんし」

（それにしたって近すぎるよお……）  
うう……そんなに見ないで」

「うーん、よく見えませんがねえ  
角度が悪いですか  
もうちょっとこう……」

「ふぁあッ……」



(何、いまの!?  
自分で触るのと全然違う……  
……って、何考えてるの私)

「どうかしましたか?」

「い、いえ……」

(なんだろう  
さっきから身体がぼかぼかしてる気が……)

「ふふふ……」

「くっ……ん……、はア……  
あ、あんまり指、動かさないで、くださ……い」

「そういえば  
オナニーしてたんでしたね  
残ったヌルヌルで奥がよくみえませんか」

(うそ、ちゃんと拭いてきたのに!?)

「これは、指でヌルヌルを  
かき出さないとだめですわね」

「ふううッ……ちょッ……先生ッ……」

ほ

ハ

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん





「確かに結城さんは処女のようにですね  
いや、楽しみが増え……ではなくて  
安心しました」

「……はあ……はあ……はい」

（うう……イキそこねたから  
ムズムズが止まらないよお……）

「ご両親への報告は保留にしましょう  
とはいえ……」

「ま、まだ何かあるんですか！  
私でしょ……処女だってことは分かったはずで  
これからも間違い……なんて！」

「落ち着いてください結城さん  
どうしたんです  
先ほどからモジモジしていますが」

「こ、これは……」

「少しカウンセリングの  
必要がありそうですね」



(なんでこんなことに……  
だけど悪いのは私……だよな  
でもでも、は、恥ずかしいよ……)

「もうすこし広げてください」

「ッ」

「本当にお兄さんとは  
セックスしていないのですか  
例えば無闇に身体を触られたりは？」

「さ、触られたりとかですか  
その……兄が転んだとき偶然……  
とかなら……」

「意図してやっってる恐れはないですか」

「そ、それはないと思います……」

(これって、私のせいで  
リトも疑われてるってことだよな  
ああもう、どうしたら……)

「では、股間の部分をズラしますよ」

「うう……  
な、なんか変なズラし方してませんか」

「この方がアソコを開きやすいんですよ  
それより、もっと力を抜かないと  
奥まで見えませんよ」

「ッ……  
そ、そんなの無理……です……」

「ふ……」

「ひゃん……ッ!!  
ちよ、あの……息、かかっています」

「しかし近づかないと確認できませんし」

（それにしたって近すぎるよお……）  
うう……そんなに見ないで」

「うーん、よく見えませんがねえ  
角度が悪いですか  
もうちょっとこう……」

「ふぁあッ……」





(何、いまの!?  
自分で触るのと全然違う……  
……って、何考えてるの私)

「どうかしましたか?」

「い、いえ……」

(なんだろう  
さっきから身体がぼかぼかしてる気が……)

「ふふふ……」

「くっ……ん……、はア……  
あ、あんまり指、動かさないで、くださ……い」

「そういえば  
オナニーしてたんでしたね  
残ったヌルヌルで奥がよくみえませんか」

(うそ、ちゃんと拭いてきたのに!?)

「これは、指でヌルヌルを  
かき出さないとだめですわね」

「ふううッ……ちょッ……先生ッ……」

ほ

ハ

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

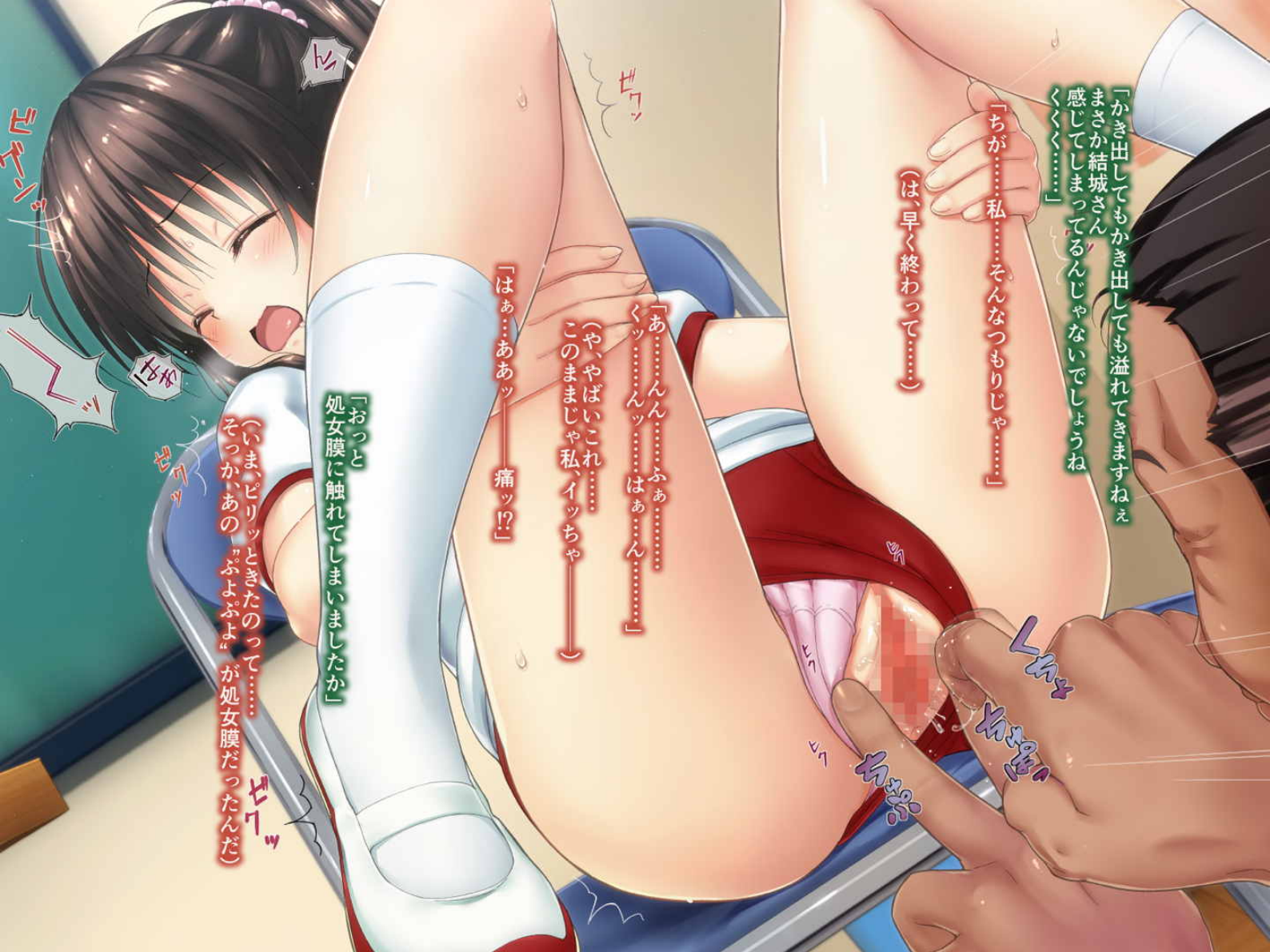
ん

ん

ん

ん

ん



「かき出してもかき出しても溢れてきますねえ  
まさか結城さん  
感じてしまってるんじゃないでしょうね  
くくく……」

「ちが……私……そんなつもりじゃ……」

（は、早く終わって……）

「あ……んん……ふあ……  
くッ……んッ……はあ……ん……」

（や、やばいこれ……  
このままじゃ私、イッちゃ

「はあ……ああッ……痛ッ!？」

「おっと  
処女膜に触れてしまいましたか」

（いま、ピリッときたのって……  
そっか、あの「ぶよぶよ」が処女膜だったんだ）

「おっ」

「おっ」

「おっ」

「おっ」

「おっ」

「おっ」



「確かに結城さんは処女のようにですね  
いや、楽しみが増え……ではなくて  
安心しました」

「……はあ……はあ……はい」

（うう……イキそこねたから  
ムズムズが止まらないよお……）

「ご両親への報告は保留にしましょう  
とはいえ……」

「ま、まだ何かあるんですか！  
私でしょ……処女だってことは分かったはずですが  
これからも間違い……なんて！」

「落ち着いてください結城さん  
どうしたんです  
先ほどからモジモジしていますが」

「こ、これは……」

「少しカウンセリングの  
必要がありそうですね」

「本当にこれカウンセリングなんですか  
さっきのにしたって……」

「オナニーしたくて気が立っているようですね」

「!?」

ギシ

「ここに呼び出されたのも  
その欲求をコントロールできなかったから  
ということを忘れていませんか」

「す、すみません……」

「とはいえ  
性欲を衝動的に解消するのが  
習慣化してしまっているとなると……」

「……」

「一つ確認しておきたいのですが  
お兄さんのことはどう思っているのですか？  
つまり恋愛感情が有るのか無いのかですが」

「それは……」



「先ほどはキツく言いましたが  
私は生徒たちの恋愛に関しては  
全面的に応援してあげたいと思っています  
それが一般的でない関係でも」

「.....」

「兄と妹でも出来るセックスの仕方  
知りたくないですか？」

「.....え？  
それってどういう.....」

「世の中にはいろんなセックスが  
あるということですが  
それでどうなのですか？」

「恋愛感情かどうかは分かりませんが.....  
でも他の誰かと付き合うというのも  
考えられなくて.....」

「ふむ.....  
ではカウンセリングの目標を二つ  
設定しましょう」

↑



「性衝動に流されないようにすることと  
アナルセックスのやり方を憶えること」

「ふああッ……ッ、ちよっ……  
なにしてるんですか!?」  
それに、あなる……セックスって?」

「もし自分を抑えられずに  
お兄さんを襲ってしまったら  
どうするつもりですか」

「ええ!? そ、それは……」

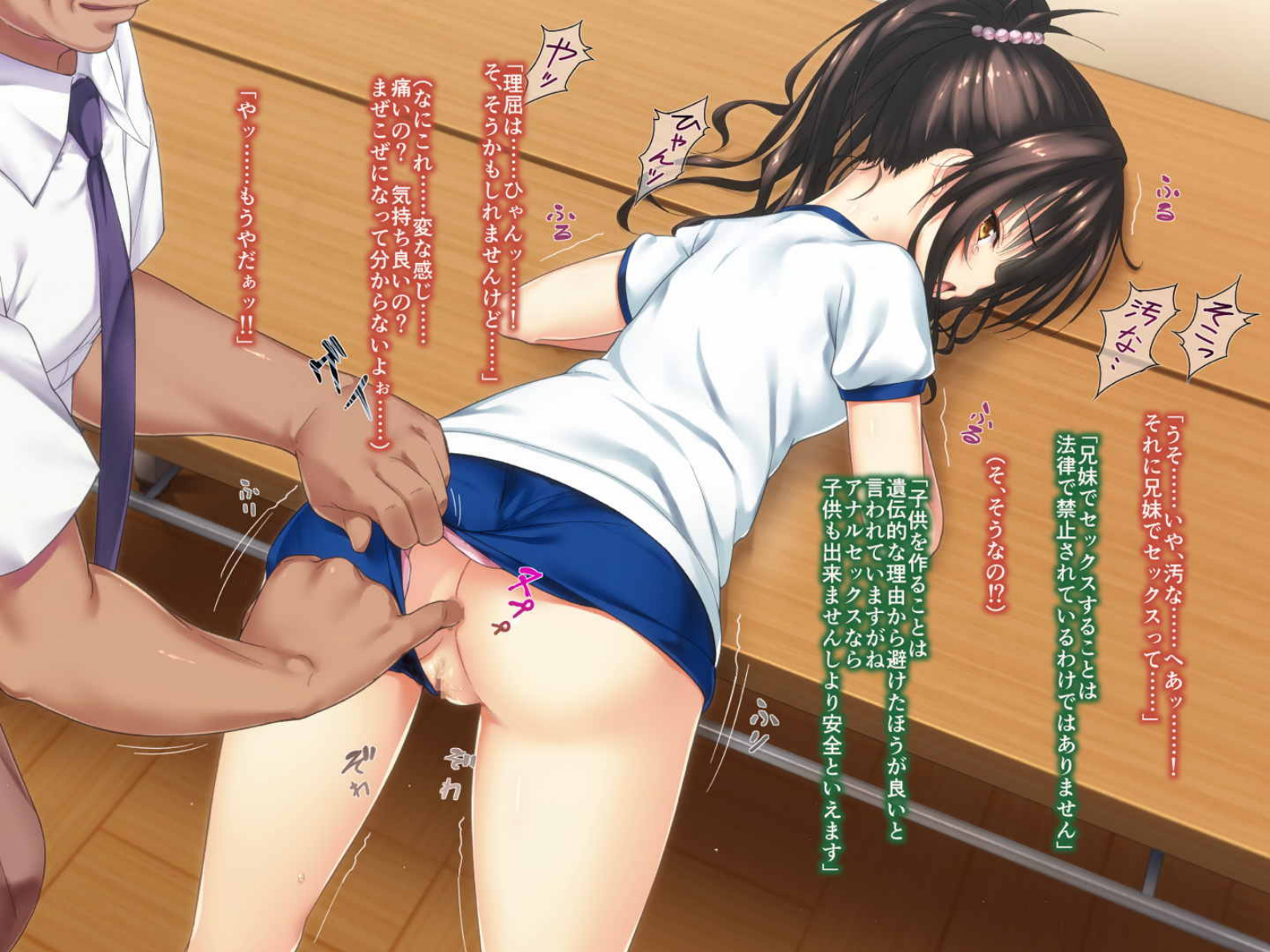
「これは、もしもの時のための  
備えでもあるのですよ」

「ひゃッ……!?」  
「そ、そこ、お尻……!!」  
「ひうう……んんッ!」

（あなるセックスって  
お尻の穴でするセックスってこと!?）

ククク……





ふふ

汚い  
アハハ

「うそ……いや、汚な……へあッ……！  
それに兄妹でセックスして……」

「兄妹でセックスすることは  
法律で禁止されているわけではありません」

（そ、そうなの!?）

「子供を作るとは  
遺伝的な理由から避けたほうが良いと  
言われていますがね  
アナルセックスなら  
子供も出来ませんしより安全といえます」

カッ

「理屈は……ひゃんッ……！  
そ、そうかもしれませんですけど……」

（なにこれ……変な感じ……  
痛いのか？ 気持ち良いのか？  
まぜこぜになって分からないよお……）

「やッ……もうやだあッ!!」

ふふ

ぞわ

ぞわ







「いつもと違う刺激が怖いようでしたら……クリトリスも……」

「ふああッ……」

「さっきので敏感になってるのにそんな優しく触られたら……!」

「どうです?」

「分か……りませ……んんんッ! いつもと違うけど、これ……これえ……」

「アソコはどんどん濡れてきてますよ」

「私、感じて……るの?」

「こんな動きはどうですか、指を曲げて……」

「そ、それダメですッ! 前の方こするのダメエ」

「あ、脚がガクガクするよお……立ってられなくなっちゃう……!」







「本当にこれカウンセリングなんですか  
さっきのにしたって……」

「オナニーしたくて気が立っているようですね」

「!?」

ギシ

「ここに呼び出されたのも  
その欲求をコントロールできなかったから  
ということを忘れていませんか」

「す、すみません……」

「とはいえ  
性欲を衝動的に解消するのが  
習慣化してしまっているとなると……」

「……」

「一つ確認しておきたいのですが  
お兄さんのことはどう思っているのですか？  
つまり恋愛感情が有るのか無いのかですが」

「それは……」

「先ほどはキツク言いましたが  
私は生徒たちの恋愛に関しては  
全面的に応援してあげたいと思っています  
それが一般的でない関係でも」

「.....」

「兄と妹でも出来るセックスの仕方  
知りたくないですか？」

「.....え？  
それってどういう.....」

「世の中にはいろんなセックスが  
あるということですが  
それでどうなのですか？」

「恋愛感情かどうかは分かりませんが.....  
でも他の誰かと付き合うというのも  
考えられなくて.....」

「ふむ.....  
ではカウンセリングの目標を二つ  
設定しましょう」

↑





「性衝動に流されないようにすることと  
アナルセックスのやり方を憶えること」

「ふああッ……ッ、ちよっ……  
なにしてるんですか!?!  
それに、あなる……セックスって?」

「もし自分を抑えられずに  
お兄さんを襲ってしまったら  
どうするつもりですか」

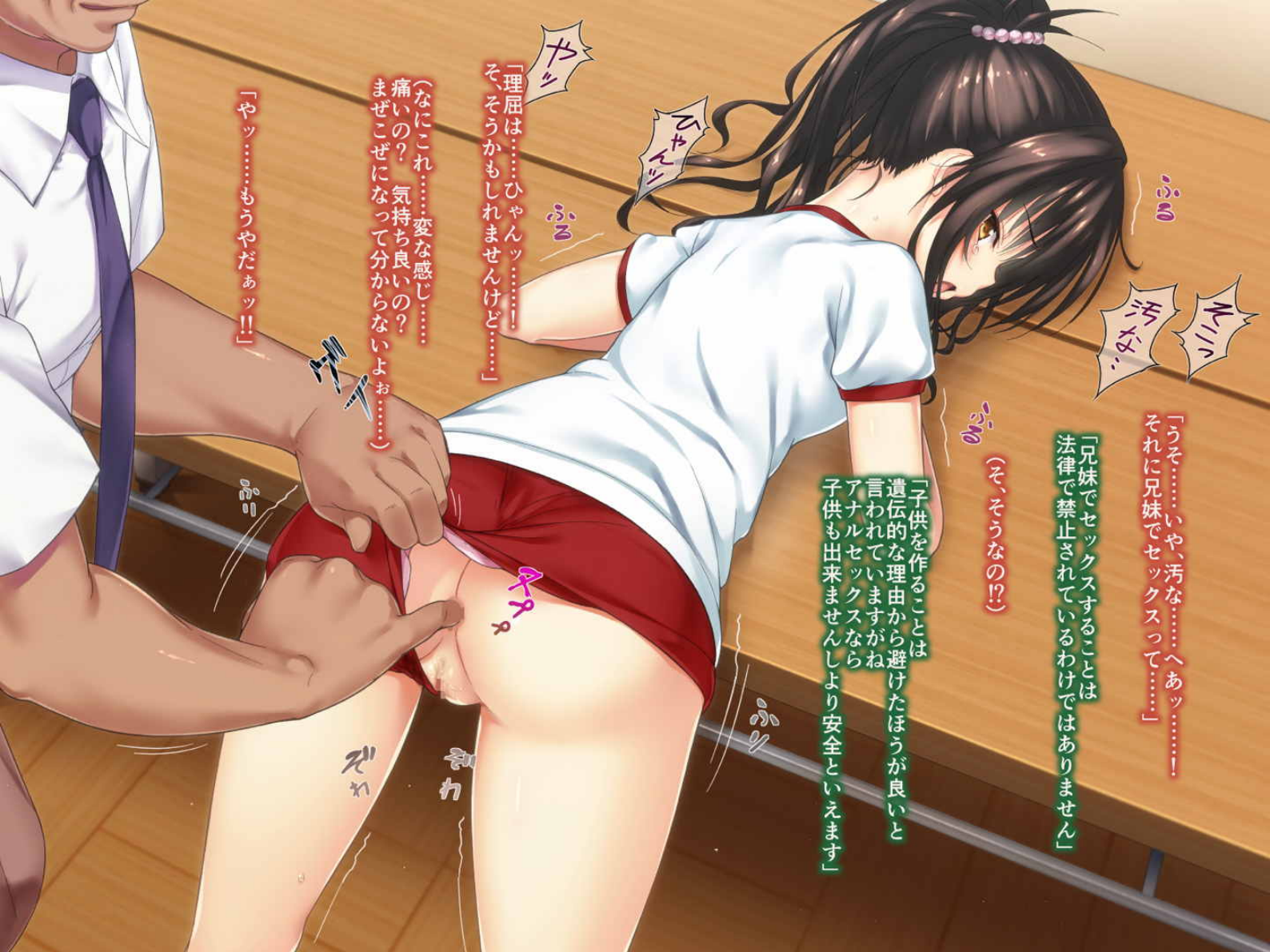
「ええ!? そ、それは……」

「これは、もしもの時のための  
備えでもあるのですよ」

「ひゃッ……!?  
そ、そこ、お尻……!!  
ひうう……んんッ!」

（あなるセックスって  
お尻の穴でするセックスってこと!?）

ククク……



「うそ……いや、汚な……へあッ……！  
それに兄妹でセックスして……！」

「兄妹でセックスすることは  
法律で禁止されているわけではありません」

（そ、そうなの!?）

「子供を作ることとは  
遺伝的な理由から避けたほうが良いと  
言われていますがね  
アナルセックスなら  
子供も出来ませんしより安全といえます」

「理屈は……ひゃんッ……！  
そ、そうかもしれませんですけど……！」

（なにこれ……変な感じ……  
痛いのか？ 気持ち良いのか？  
まぜこぜになって分からないよお……）

「やッ……もうやだあッ!!」

ふふ

「汚な……」

ふふ

「やッ……」

ふふ

ふふ

「やッ……」

ふふ

ぞれ

ぞれ

「やッ……」







「ボクン」いつもと違う刺激が怖いようでしたら……クリトリスも……」

「ふああッ……」

「さっきので敏感になってるのにそんな優しく触られたら……!」

「どうですッ」

「分か……りませ……んんんッ! いつもと違うけど、これ……これえ……」

「アソコはどんどん濡れてきてますよ」

「私、感じて……るの?」

「こんな動きはどうですか、指を曲げて……」

「そ、それダメですッ! 前の方こするのダメエッ!」

「あ、脚がガクガクするよお……立ってられなくなっちゃう……!」

ウツン

クチュ

ズン

ウツン

ウツン

クチュ

クチュ

ウツン

クチュ

クチュ

ヒク





「ひゅっんッ——ッッッ！」

フシッ……チヨロロッ……

（……かえっ  
出……ちやってるっ  
おしっこ……出てる!?）

「や、やあぁッッ！」

「恥ずかしいがることはありませんよ  
お尻で気持ちよくなると  
慣れないうちはそうなってしまふのです」

「でも……  
恥ずかしいものは恥ずかしいんです……うう」

「なら、お兄さんとセックスするとき  
恥ずかしい思いをしないですむように  
頑張りましょう」

「ふあぁッ……!?  
こ、これ……いつまで続けるんです!?」

ぐりゅん

ムンムン

ムン

フシッ

「二度イクまでにしましょうか  
そのままだと風邪を引いてしまいますから  
脱いでしましましょうね」

「え、ちよつと待つ……」

(うう……)  
脱がせる前に聞いてよお……  
これ手で隠さないと  
全部見えちゃうじゃない)

「あ、あの……  
手で……隠してもいいですか」

「また恥ずかしくて……  
と言いたいところですが  
まあ、肛門さえ露出させていれば  
かまいませんよ」

(でもこれ、全部見えてるより  
エッチな気も……)

「今度は少し太い指を入れますよ」







どろろ  
「ふ……ぬぬ……んんッ」

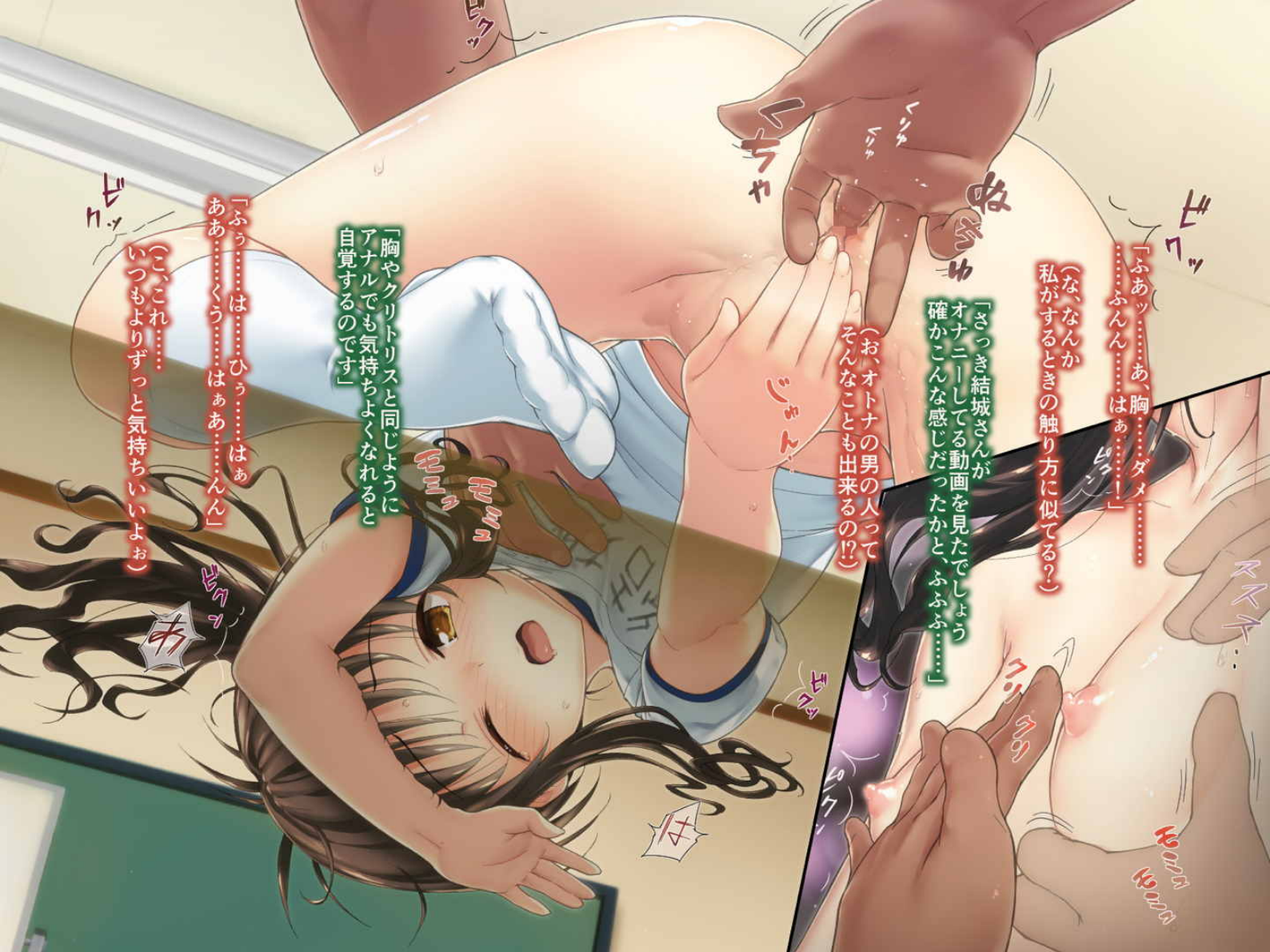
（さ、さっきより押し広げられて……  
それに奥まで……くる……）

「反射的に締め付けないように  
なるのが大事ですよ  
締めすぎると  
男の人も痛いですからね」

「そ、そうなんです……ふあああ」

（抜けていくときゾワゾワするうっ  
ここれトイレで  
ウン……するときみたい……）

「いい反応です  
その気持ちよさと  
いつもの気持ちよさを結びつけるんです  
確か……こんな感じでしたっけ」



「ふあッ……あ、胸……ダメ……  
……ふんん……はあ……」

(な、なんか  
私ができるときの触り方に似てる?)

「さつき結城さんが  
オナニーしてる動画を見たでしょう  
確かこんな感じだったかと、ふふふ……」

(お、オトナの男の人って  
そんなことも出来るの!?)

「胸やクリトリスと同じように  
アナルでも気持ちよくなれると  
自覚するのです」

「ふう……は……ひゅ……はあ  
あぁ……くう……はあぁ……んん」

(こ、これ……  
いつもよりずっと気持ちいいよお)

ほっ

ほっ

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

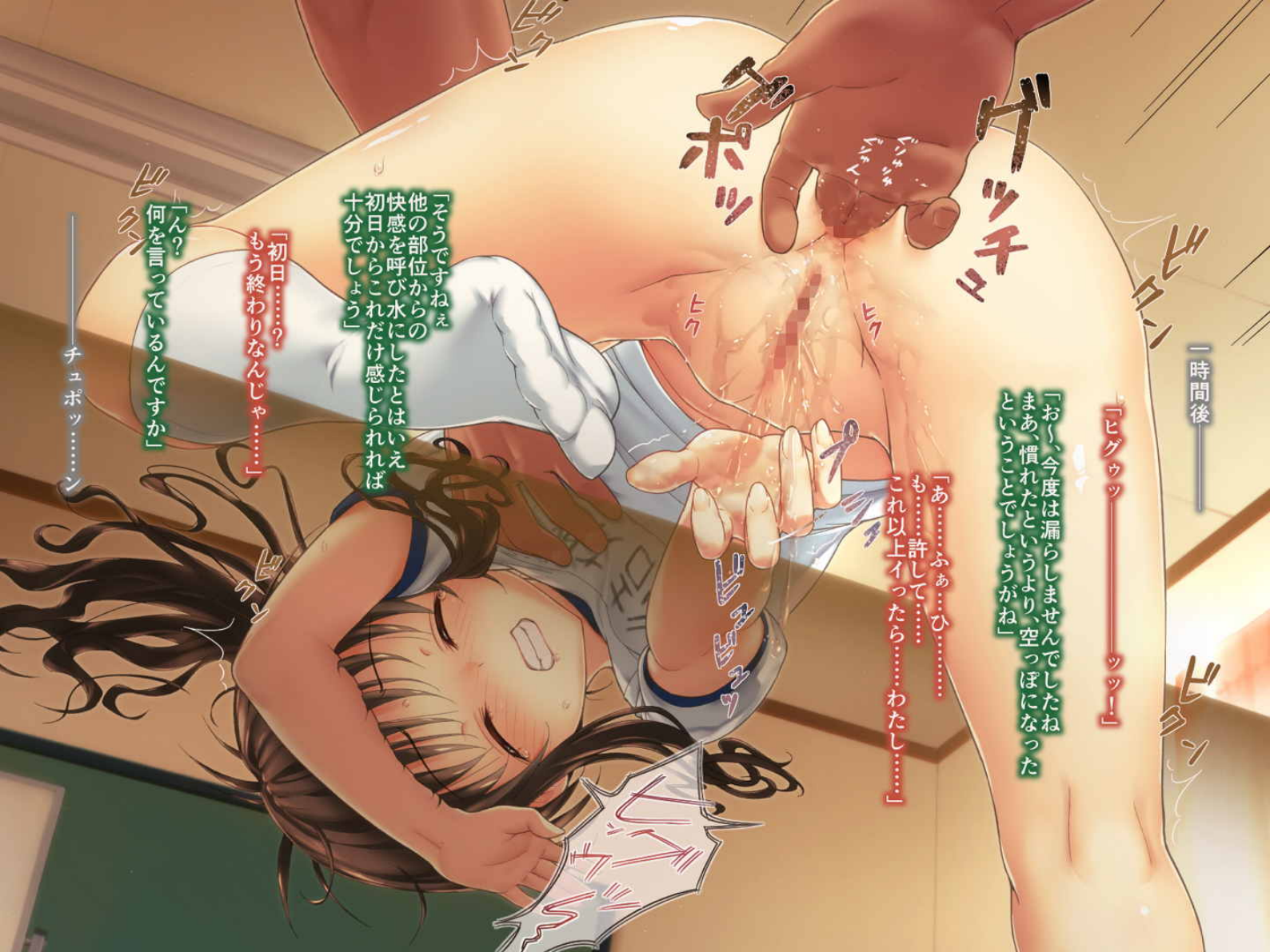
んん











—時間後—

「ヒグウツ ツツ！」

「お、今度は漏らしませんでしたね  
まあ、慣れたというより、空っぽになった  
ということでしょうかね」

「あ……ふぁ……ひ……  
も……許して……  
これ以上イッたら……わたし……」

「そうですねえ  
他の部位からの  
快感を呼び水にしたとはいえ  
初日からこれだけ感じられれば  
十分でしょう」

「初日……？  
もう終わりなんじゃ……」

「ん？  
何を言っているんですか」

チュポッ……ン



チヨ  
ポツ

ナル

「ふひッ……」

ナル

「もっと慣れておかないと  
肛門が切れてしまう恐れがありますからね  
明日からしばらく  
放課後に指導室へ来てください」

「ぞ、そんな……」

「ふふふ、名残惜しそうに  
ぽっかりと開いてますよ」

フス……

「は……ふあ……ひ……は……」

「おっと、やはり美少女でもオナラは  
……って、もう耻すかしがる  
気力もないようですね  
少し休んだら  
あとで家まで送っていつてあげますよ  
くくく……」

は  
ナル

はッ

ヤロ%♡

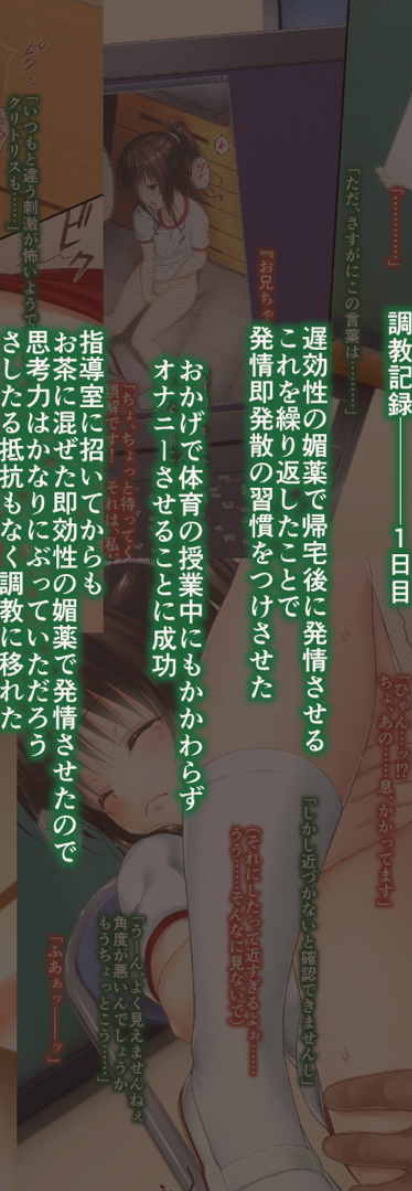
は

は





調教記録 1日目



遅効性の媚薬で帰宅後に発情させる  
これを繰り返したことで  
発情即発散の習慣をつけさせた

おかげで体育の授業中にもかかわらず  
オナニーさせることに成功

指導室に招いてからも  
お茶に混ぜた即効性の媚薬で発情させたので  
思考力はかなりにぶっていただろう  
さしたる抵抗もなく調教に移れた

早くあの処女膜を私のモノでぶち破りたいが  
今は我慢だ

このままアヌスの調教をすすめつつ  
腸壁越しに膣側の感度もあげ  
いずれはオマンコセックスを求めらるまでに調教する  
考えただけで股間に血が集まる

これからは学校内でも発情させ  
それを私が発散するという行為を習慣化させよう





「二度イクまでにしましょうか  
そのままだと風邪を引いてしまいますから  
脱いでしましましょうね」

「え、ちよつと待つ……」

(うう……)  
脱がせる前に聞いてよお……  
これ手で隠さないと  
全部見えちゃうじゃない)

「あ、あの……  
手で……隠しててもいいですか」

「また恥ずかしくて……  
と言いたいところですが  
まあ、肛門さえ露出させていれば  
かまいませんよ」

(でもこれ、全部見えてるより  
エッチな気も……)

「今度は少し太い指を入れますよ」





どクッ  
「ふ……ぬぬ……んんッ」

（さ、さっきより押し広げられて……  
それに奥まで……くる……）

「反射的に締め付けないように  
なるのが大事ですよ  
締めすぎると  
男の人も痛いですからね」

「そ、そうなんです……ふあああ」

ぞぞぞ

（抜けていくときゾワゾワするうっ  
ここれトイレで  
ウン……するときみたい……）

「いい反応です  
その気持ちよさと  
いつもの気持ちよさを結びつけるんです  
確か……こんな感じでしたっけ」







(あ、あれ……？  
いつのまにか入れてる指増えてない？)

「ひん……ふあ……は、ふあ……」

「いい感じに心も身体もトロけてますね  
じゃあもう少し強く……」

「ひあッ……ひんッ……アッ……ハアッ」

(あちこちの気持ちよさが  
集まって……混ぜ混ぜ……)

「あッ、あッ、あッ……お、ひり  
やッ、勝手に……ピクピクって  
……はッ……ああ……」

(これ、くる……大きいの……  
ダメ……あああ……また  
も、漏らしちゃ……)

「ひぐううう」

「はあッ」

「あッ  
あッ  
あッ」

「はあッ  
はあッ」

「はあッ  
はあッ」

フシヤアアアアアッ

「は、ハヒッ……ひふ……はあ……」

（私……お尻で……イッたの……？）

「実に優秀ですねえ  
飲み込みが早くて助かります」

「そ、それ……ぜんぜん嬉しくないれふ」

「い、い、い、え  
セックスでより強い快感を得るためには  
双方の努力が不可欠ですから」

「は、はあ……」

「結城さんのように  
努力を惜しまない人と結ばれる男性は  
幸せでしょうね  
ささ、今の感覚を忘れないうちに  
もう一度、練習しておきましょう」

「え？ 待つ、私イったばかりで……  
や……ッ……はあ……  
んんッ……んああッッッッッ……」

ヒッッッ

ヒッッッ

ヒッッッ

ヒッッ

ヒッッ

はッ

ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ

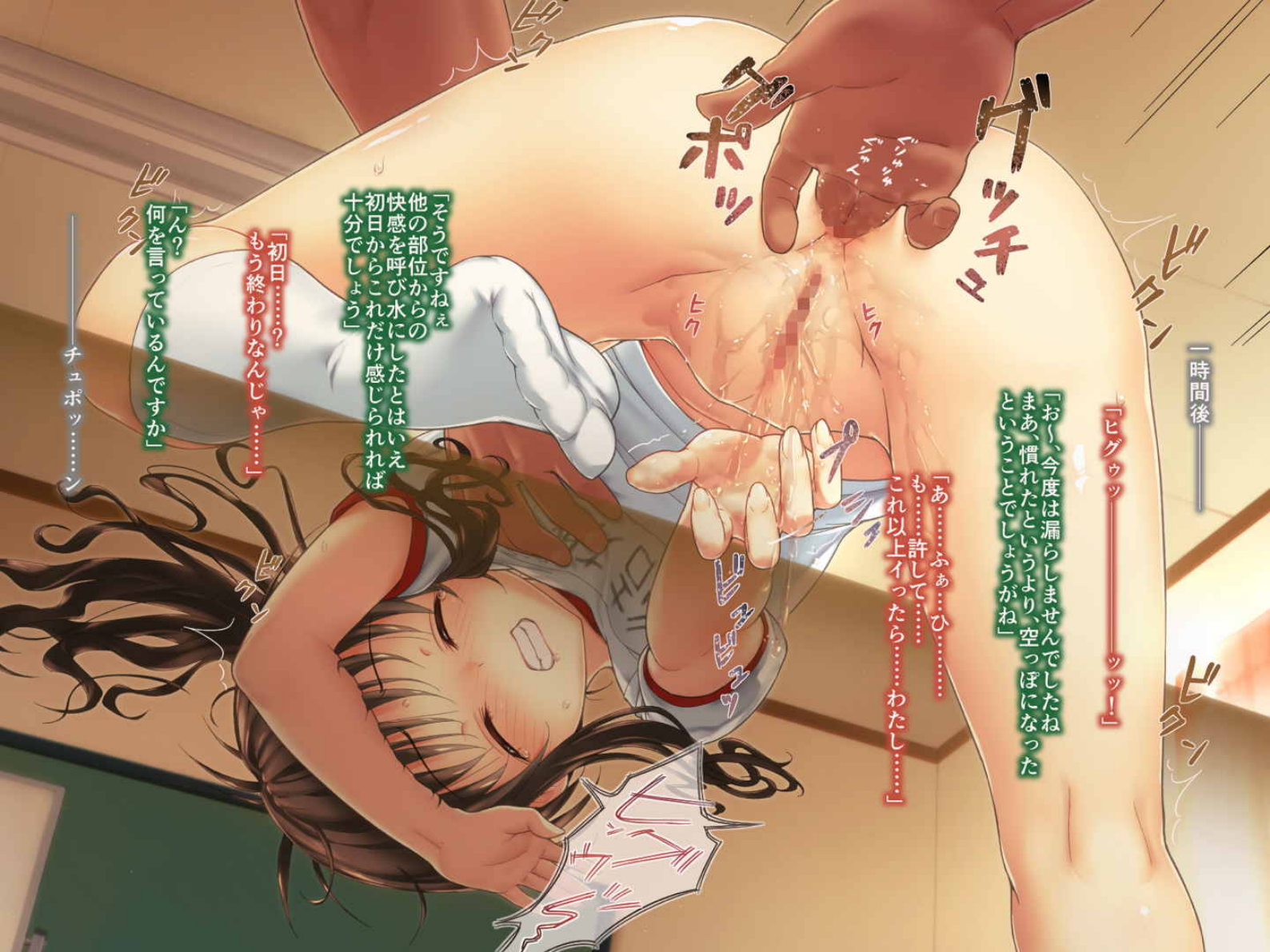
ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ

ヒッッ





「ん？  
何を言っているんですか」

チュポッ……ン

「そうですねえ  
他の部位からの  
快感を呼び水にしたとはいえ  
初日からこれだけ感じられれば  
十分でしょう」

「初日……？  
もう終わりなんじゃ……」

「お、今度は漏らしませんでしたね  
まあ、慣れたというより、空っぽになった  
ということでしょうかね」

「ヒグウッ  
ッッ！」

「あ……ふぁ……ひ……  
も……許して……  
これ以上イったら……わたし……」

一時間後

ド  
ン  
ン



チヨ  
ポツ

ナル

「ふひッ……」

ナル

「もっと慣れておかないと  
肛門が切れてしまう恐れがありますからね  
明日からしばらく  
放課後に指導室へ来てください」

「ぞ、そんな……」

「ふふふ、名残惜しそうに  
ぽっかりと開いてますよ」

フス……

「は……ふあ……ひ……は……」

「おっと、やはり美少女でもオナラは  
……って、もう耻すかしがる  
気力もないようですね  
少し休んだら  
あとで家まで送っていつてあげますよ  
くくく……」

は  
ナル

はッ

ヤロ%♡

は

は



「きよ、教頭先生!?  
なんでここに」

「防犯カメラにね  
結城さんが授業を抜けだして  
更衣室へと入っていく様子が  
映ってたんですよ」

「これは、その……」

「具合が悪いのなら  
すぐ保健室に行くはずですからねえ  
オナニー……してたんじゃ  
ないわね」

ギョギョ

セクシー

「あ、うう  
突然……したくなっちゃって……」

「学校でオナニーしたくなっても  
放課後までは我慢する、という  
目標を立てたばかりではないですか」



「それに、昨日は指導室に  
来ませんでしたよね」

「こ、この前みたいなのは怖いんです  
何も考えられなくなる  
みたいなのは……」

「アナルセックスの練習は  
備えても言ったでしょう  
衝動のままにお兄さんと一線を超えない  
自信があるなら構いませんが」

「それは……」

「そうでしょう  
今のこの状況を見れば  
そんな心配は要りません  
とは言えない」

「……あ……」

「しょうがないですねえ  
結城さん、手を……」

「え、ちょ……！  
ひあッ……あ……！」

ふりかへ



「結城さんは  
初めてオナニーしたときの  
憶えてますか」

「え……うん……」

「最初は恐る恐るだったはずですよ  
知らない領域を  
一人で開拓するのは怖いものですから」

（確かにそうだったかも……）

おそる

「でも今では違うでしょう  
性的な気持ちよさも識っているし  
私という指導者もいる」

ん

「自分で触ってみるってこと……ですか」

「そうです  
私が見てあげますから  
一度自分の手で体験してみてください  
そうすれば怖くなくなるでしょうから」

「自分で……」

ふあ

ひゅ

「んんんッ……！」

（うわ……指入っちゃった  
熱……お尻の穴の中ってこんななんだ  
トイレやお風呂で入り口だけなら  
触ったことあったけど……）

「どうです  
アソコとはまた違った感触でしょう」

「はい……んん……はあ……んん……」

（アソコよりも柔くて、でも入り口はキツくて  
ふあ……抜くときぞわぞわする……）

んんんッッ

「分かっていると思いますが  
爪を立てないように  
勝手が分かるまではゆっくりと……」

「はあ……ふ……う、うんんッ！」

「お尻の穴の締め付けてこんなに強いんだ  
指がぎゅーってなって」

ビクッ

ビクッ

ぬふふふ

キムッ

キムッ

ビクッ

ビクッ





(中で動かすのも……気持ちいい……かも) すごい……指、全部入っちゃってる

「……さん、結城さん」

「へっ!! あ、はいッ」

「夢中になるのはいいですがそろそろ……」

「あ、あ、水泳の授業終わっちゃったりせつかく気持ちよく泳いだのに!」

「今日、暑いもんね」

「ッ!! 授業が終わって……」

「マズいですねえこれはさすがに見つかると言い訳のしようがありません」

「ど、どうしたら……!」

「結城さんこっちへ」

「ハッ」

トロ……

!?

「ぬうう……  
さすがにロッカーに隠れるのは  
無理があったでしょうか……」

「せ、狭いですね……」

（うう……途中で止めちやったから  
お股がすっごいムズムズする……）

「んん……は……ふううう……んん」

「結城さん  
あまりモゾモゾすると……」

「あれ、今なにか聞こえなかった？」

「え、そう？」

「……ッ……」

「バレてしまいますよ  
しばらくは大人しくしていきましょう  
これも訓練です」





「ほんと……なんで我慢できないんだろう  
ああ……オナニー……したい……  
何か気を紛らわせるもの……」

「あれ？ なんだろう……これ  
お尻のあたりに固いものがある  
こんなのあったっけ」

「はあ……はあ……ん……ふう……」

「な、なんでもいや……  
ちよつとくらいなら  
これで……擦っても……」

「結城さん……それはマズいです  
あんまり動くと私のスポンが脱げて……」

「はあ……ん……あ……ん……  
音……立ってないようにしますから  
ちよつとだけ……」

「いえ、そうではなくて……」



ビク

ビク

ビク

「大丈夫ですか結城さん」

「か……は……ひ……  
お尻……お尻があ……」

「言にくいことなのですが……」

(い、息……お尻……  
串刺し……苦しい……何……  
大きい……分からない……)

「は……は……か……は……」

「おうふ……、すみません  
結城さんを止めようとしたのですが  
逆に水着をスラしてしまっただようですね」

(なにに!? 何かお尻に入って……  
ふ太いいいッッッッッ)

ズブズブズブ

「へ……ッ……ンッッッッッ」



「挿入ってしまったようです  
私のペニスが」

「……………は……………ふえっ？」

（へニス……………って  
おちんちんのことだよね  
お尻の穴に？ 教頭先生のおちんちんが？）

「シヨックなのは分かりますが  
ここは我慢してください  
抜きたくても動けませんので」

「は……………は……………あ……………  
動くもなにも、身体が痺れて……………」

（入り口が  
ばんばんに拡がってる……………と思う  
けどそれ以外の感覚が無くて  
身体も自分のじゃ無くなっちゃったみたい）

「いきなり大きなモノが入ってきただので  
身体がビクビクしてるんでしょね  
しばらくしたら元に戻りますよ」

「は……は……おふ……ん……」

（お尻の穴だけ……  
やたら熱くて……どくんどくんって  
脈打ってるのが伝わってくる）

「これが……教頭先生の……あッ!?」

（あ……あああ……そうだ  
教頭先生のおちんちんが入っちゃったって  
そんな……これ……アナルセツ……）

「先生……これ、あの」

「落ち着いてください  
これは事故です  
例外的なもの、ノーカンですよ」

「あ……」









「ぎゅってされるの安心する……」

「それに  
お尻には処女膜も無いですからね  
それほど気にする必要ありませんよ  
これも良い経験と思いましょ」

「これも……経験……」

「そろそろ身体感覚も  
戻ってきたのではないですか  
アヌスも、痙攣するだけじゃなく  
ぐにぐにと動くようになってますよ」

「ほんとだ……でもこれ  
一緒にオナニーしたい気分まで  
戻ってきてる……」

「あ……く……んん……」

「もどかしい……  
お尻に、おち……が入ってるせいで  
余計動けないから……」





「わんっ——」  
(教頭先生なにを!?)

「どうせ我慢できなくなるなら  
私が少し手伝ってあげますよ」

「おおお……ふッ……んんんッ——」

(身体……揺らして……  
お、お腹の中がゆっくりに  
かき回されてる……)

「おふっ……おほお……はッ……お」

(なにこれ、どこまで入ってるの!?!  
知らない場所から  
気持ちいいのが拡がって……)

「あああ……凄……  
これがアナル……セックス……」







(身体が反射的に跳ねちゃう  
その度に目の前がチカチカして  
これだめ、刺激……強すぎて……)

ヴヴヴヴヴ……

「ンンンンンッッッッッ」

(声、抑えられない  
バ、バレちゃう……みんなにバレちゃう)

「結城さん頑張って!  
このままバレたら  
お兄さんのこともバレて大問題ですよ」

(そんなのいやあ!  
でも、ああ……だめ、我慢ムリ  
からだ……勝手にビクビクしてッ  
イクッ……お尻でイクッ……!)

「ああアアアッッッッッ」

フシヤアアアアアッッ







カウンセリング開始から7日

「まさか公園の草むらで  
自慰行為にふけるなど……  
私以外の者に見つかっていたら  
どうなっていたか」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「あぁ、もう少しで家につけたのに  
本当にどうしちゃったんだらう  
最近、オナニーしたくなること  
多すぎるよお……」

「うーむ  
我慢できるようになるのが一番ですが  
そもその原因を探るほうが  
良いのかもしれないねえ」

「それってどういう……」

「心因性のものかもしれませんが  
例えばお兄さんとセックスしたいという  
想いが強すぎて暴走してしまっているとか」







「な、なにを……!?!」

「試しに、私のことをお兄さんだと思っ込んでカウンセリングを受けてみてはどうでしょう」

「ええッ!?!」

「多少なりとも精神的に満たされればムラムラする回数も減るかもしれませんよ」

「(い、いくら目隠ししてもそれは……)」

「私は結城さんのことを『美柑』と呼びますからいつもお兄さんに接するようになしてください」

「えええ……」

「じゃあ、美柑……」

「ひゃッ!?! あ、また、お尻……」

「(これを……今、お尻に入ってる指をリトのだと……思うってこと……?)」

ムムム

!?

カカカ

ゴク

ブル

ブル

ブル

ブル



「だいが慣れてきたね  
すくスムーズだ  
指二本も簡単に飲み込んでいくよ」

「そ、そうかな……ふあ……あ……」

「ここに俺のチンポを入れたら  
凄く気持ちいいだろうな」

（リトの……チンポ……）

「今、キュって締まったよ  
そんなに俺のチンポが欲しいの」

「うそ、恥ずかし……んんッ……  
あ、や……そんな、強い……」

「ありがとう  
俺を迎え入れるために  
こんなに努力してくれて」

「リト……リト……」

（本当に、こんな風に  
リトに受け入れられたら……）

ニトニト  
ハ  
ヤ  
ググ





「じゃあ、舌でもっとほぐしてあげるよ」

「え……舌？  
ひああッ、ふあッ……これ、ぬるぬるして  
んんんッ……でも……汚な……ああッ」

「美柑の身体に汚いところなんてないさ」

「や……でも……でもお  
あああ……舌、ジュボジュボしちゃ……」

（そんな、音たてないでえ  
出し入れ……激しすぎて  
これ、いつもより早く……）

「ほらイキそうならちゃんと言って」

「イ、イク……イッちやいそッ  
お尻、舌でほじられて……」

「ほらイッてもいいよ、ほら……」

「イク……お尻、イクウッッ」



「すっかりお尻でイけるようになったね」

「う、うん……私  
いっぱい練習したから……」

「これだけほぐれていれば  
チンポを入れても  
十分に感じられるだろうね」

「そうかな……」

「じゃあ、チンポを入れるよ」

「うん……」

（あれ……？  
入れても良いんだっけ？）

ズブズブッ

んんん？

んんん

んんん

ポッ

ポッ

んんん

んんん





「おほおおおッッッ」

（こ、これ……チン……ポ……お尻の穴、チンポ入っちゃってる……）

「くぅぅ……さすがにキツイあれだけほぐしたのに……」

「きよ……教頭……先生……」

「ぼらぼら……演技を忘れてますよ美柑さん」

「早く……抜い……で……」

「まあそう言わずに」

「おおお……ふッ……んんんッッッ」

（お、奥の方グリグリだめえッ！）

「この実践形式の訓練に耐えられればお兄さんとのセックスまであと一歩ですよ」



「ま、まっへ、これ……  
刺激が……強すぎ……」

（やっぱりこれ凄いい……！  
よく分らないけど……  
指より太くてずつとおっきくて……）

「大丈夫か美柑  
落ち着くまでぎゅってしてやるぞ」

「あ……」

（この前と同じ……これ安心する）

は♡

は♡

あ♡

ぎゅ♡

（苦しいけど……  
この前より慣れてるのが分かる  
だってお尻の中からも  
同じ鼓動がするの……感じるもの……）

ドクン……ドクン……  
ドクン……ドクン……

プル

プル

プル

ギツ

ギツ

ギツ



「落ち着いたみたいだから  
そろそろ動いてもいいか……？」

「……………うん  
ふっ……んんんんっ」

（お、お尻の穴が引っぱり出されるうっ！  
背筋がゾワゾワして……  
あ、脚がガウガクする）

「ひっ……ああッ……んんっおふお……………」

（今度は入って……  
奥の方……当たる度に  
頭の中で電気が走るみたい……）

「偉いぞ美柑  
ちゃんとヒストン……  
アナルセックスできてるぞ」

「……………んんんんん……」

「……………んんんんん……」

「……………んんんんん……」





「だ、だめえ……  
いっぺんにするの、だめ……んん……」

（あああ……胸とアソコも  
そんな気持ちよくしないで……）

「頑張ってる美柑へのご褒美だよ  
うんと感じていいんだ」

「ひゅうっ……  
いい……けど、もつと弱く……  
そんなにすると、す、すぐ……」

「すぐ……、どうなるのかな？  
例えば乳首をつまんだりしたら……」

「まっ、それだめッ、キひやうッ……  
大きいのキちやうからあ……  
ああ、あああッ！」

「フワッ♡」

「ベクベク」

「ベクベク」

「フワッ♡」

「フワッ♡」







「ふいっおお」  
(は、激し……！  
ほんとに壊れちゃう……！  
お尻の穴、ガバガバになっちゃう……！)

「や、怖っ……ひぐんんッ……くろッ  
アヒッ……ひう……止め……」  
(怖いよお……、怖いのに……)

「ふふ、良い反応をする……」

(なんで……  
なんでこんなに気持ち良いの……！)

「ほらイッていいよ  
思いっきりイッて！」

(熱い熱い熱い……お尻も、お腹も……  
さっきよりも強いキちゃう……！  
奥の方からキちゃうよお……！)

ガクガク  
おん

ガク

ガク

ズッ  
おん

ズッ  
おん

ボッ









「ずいぶん慣れてきましたね  
これならお兄さんも……..  
あーすみませんが  
少しだけ待っていてもらえますか」

「は、なにしてるんですか」

「いえ、私もイキそうだったので  
自分で処理しようと思いましたが」

「それってどういう……?」

「今やっていることは  
あくまで美柑さんのための訓練  
私が欲望のままに  
中に出すわけにもいきませんから」

「そ、そういうものですか……!」

(確か男の人はイクとき出るんだよね  
白くてねばねばしてる……精液  
じゃあ今、この目隠しの向こうでは  
教頭先生が一人で……)





「う……イ、イクッ！」

「ひッ……!?」

（うわわ……  
なんかちよつと口に入った……）

「おっとっと  
少し飛び散ってしまいました」

「うう……だ、大丈夫です」

（これ……口に入っても平気……だよ  
うう、なんかちよつと苦くて……  
変な味……）

「美柑さんは精液を見たことが  
ありますか」

「いいえ……」

「見たいですか？」

「ええッ!?  
……興味は、ありますけど……」

て、  
ッ!  
!?

ホッ

チヤ  
ッ





「うわ……」

「こんなに出るの!?  
それに、なんか独特のニオイ……  
ほんとはこれがお腹の中に出るんだ」

「年頃の男性は、夢精といつて  
寝ているときに無意識に射精してしまう  
ことがあります  
お兄さんの下着を洗濯するときなどに  
見たことがあるかと思ったのですが」

「そ、そんなの気にしたことなかった……」

「それでどうです  
お兄さんとの擬似体験は  
いつもより満たされましたか」

「わ、分かりません……  
とうかやっぱり  
教頭先生は教頭先生としか  
思えなかったというか……」

「うーん、まあ、続ければ  
効果があるかもしれせんし  
機会があればまたやってみましょう」

「お兄さん」

「アッ」









キイ



ザ...

『年頃の男性は、夢精とって寝ているときに無意識に射精してしまうことがあります』

(あれから洗濯するときに気にして見てみたけど……  
あんなのが付いてること無かった)

(ひょっとして自分でしてるのかな……)







（これが……リトのチンポ……）

（改めて見ると変なカタチ……これ多分大きくなってない状態だよねど、どうしよう……触って……）

（うわわ……ふにふにしてる）

「……ん」

「……ッ!？」

（ていうか……リトったら一度寝ちゃうとぜんぜん起きないよね我が兄ながら心配になるよ）

（これ、触ってたらおっきくなるのかな……）

シュツ……シュツ……シュツ……

（え!? わか、固くなってきた……）



(こ、こんなに大きくなるの!?!  
無理無理、こんなの絶対入らないよ!)

は  
(わ、先っちょヌルヌルしてきた……  
それにこのニオイ……  
この前かいだ……精液のニオイ)

「や、ヤバ……  
なんか、すごく……シたい……」

「リ、リトお……あ……ふん……  
お尻の穴……イイ……」

(私……お尻の穴でセックスできるように  
練習してるんだよ……  
リトとしてみたくて……)

「んん……はあ……ふあ……いい……」

(指だって何本も入っちゃうんだから……  
きつと、このリトのチンポだ……)

「リトのチンポだ……」

「リトのチンポだ……」



（うう、暗いし後ろ向きだからよく分からないけどこのへん……かな……）

「はー、はー……」

（教頭先生はもっと練習が必要だって言ってたけどあんなに簡単にお尻でイけるようになったんだもん大丈夫だよ）

「はあ、はあ、はあ……」

（このまま腰を降ろせば……リトのチンポが入って……それで妻く気持ちよくなって……）

「ううん……美柑は俺の自慢の妹だよ……」

「……」

ググググ……

クアッ

キ

再





キイ——カチヤ

(私……今、何しようとしてたの?)

(勝手に部屋に入って  
勝手にセックスしようとして……  
ううん……アナルセックスだって  
私が勝手に練習してただけで……)

(私……一人で先走って  
リトの気持ちぜんぜん考えてなかった)

(リトは私がセックスしたいって言ったら  
どう思うんだろう……)

(リトは……)



ザ……

「それで、じっくり考えたくて今日は学校を休んだのですね」

しゅん……

「私にとっては今の兄との関係が何より大事だと思ってたんです」

「では、私の教えはこれ以上必要ない？」

「はい……  
急にエッチなことシたくなっちゃうのも我慢できるように自分一人でなんとか……」

「そんなに申し訳なさそうな顔をする必要はありませんよお兄さんとの行為を踏みとどまれたのですからそう考えるのも自然なことでしょう」

「本当にすみません……」

「カウンセリング終了の饅頭……というのも変ですが……」

「それは……!?」





「デイルドーといって  
見てのとおり男性器を模したものです  
次の練習のために用意していたのですがね」

ドクン

如キ

「自分で慰めるにしても  
こういうものがあつた方が捗るでしょう」

「昨日みたリトのと……  
はッ……な、なんでもないです」

（や、やだ……思い出したら  
また身体が熱く……）

「どうかしましたか？」

「いえ……あの、その……」

「なんだつたら  
一度使ってみたらどうです  
大きさが合わないなら別のものを  
用意しますよ」

「そ、それじゃ……」

スッ



「こ、こんな感じでしょうか」

「そうです、吸盤でくっつけて……」

（ああ……、私……  
机の上でなんて格好してるの）

「ローションで濡らして……  
もちろん美柑さんもお尻をほぐしておかないといけませんよ」

「は、はい……」

（いつもより興奮してるかも……  
デイルドロー……リトと同じチンポ  
これが私の中に……）

「あの、もう入れても……」

「え？ もっとほぐさなくて大丈夫ですか」

「はい、大丈夫、大丈夫です」

（早く入れたい、はやくはやく……）

「では、どうぞ」

「あ♡」

クイ

クイ

クイ





ズブズブッ  
ズブズブッ  
ズブズブッ  
ズブズブッ  
ズブズブッ  
ズブズブッ

(こ、これも……  
さっきのより大きいけ……ど)

「あ、あの、もっと大きいのは……」

「ほー、美柑さんが見た  
お兄さんのチンポは  
なかなかの大きさだったようすな」

「えッ!? あ、そ、そうです」

(嘘……  
リトのは最初と同じくらいだった  
それを私、物足りないって……)

「今、別を用意しますから  
少々お待ちを……」

(ひよっとして  
リトとアナルセックスしても  
気持ちよくなれないんじゃないか……って  
違う、私はもうリトとは……)

「では、直接私が挿入れてあげましょう……」







ズンツツツ

「ほ、おほおほおッ」

(「これえ……  
お腹の奥までズンツツってくるこれえ……」)

「教頭先生の……チンポお……♡」

ツ!!

ドクッ  
ドクッ  
ドクッ

「手持ちのモノではこれが一番なもので  
どうです、この大きさは」

「は、はひ……  
おっきくて、固くて、脈打ってて……  
すごく……イイですう……」

「それはそれは  
しかし、このサイズのデイルドーだと  
取り寄せになりますから  
しばらく待ってもらわないと  
いけないですねえ」

「そ、そう……なんでふか」

ゴッ  
ゴッ  
ゴッ



「あ、もう抜ひて……ふわあッ!!  
なにを……」

「そっ、いえは  
美柑さんの妄想ではどんな風  
にお兄さんとセックスするんです」

「な、なんで今、そんなこと……」

「おっと、聞きたいのは  
ディルドーをどう使うかでして  
よほど激しい使い方をしないかぎり  
壊れることはありませんが  
念のため確認しておこうかと」

「おっふおあ……!!  
はあッ……ちよ……動かない……でッ!」

「例えば  
こんな風に体重をかけて  
勢いよく挿入したりすると……」

はひん

?

ハッ  
ハッ  
ハッ

ハッ  
ハッ  
ハッ

ハッ  
ハッ  
ハッ

ハッ  
ハッ  
ハッ





ずぱん

「お、おふッおおお

（く、串刺し……  
お腹の一番奥に刺さってるう  
目の前がチカチカしてえ……）

「根本部分が裂けてしまうかも  
しれませんので注意してくださいね」

「は、はい……」

「それとテコの要領で回したりすると……」

「ひあああッはああッ  
ひ、拡がっちゃう  
それに奥ッ、グリグリしちやだめえッ！」

「これも  
根本に負担がかかるので  
あまり強くしない方がいいですね」

（あ、あれ……？  
そっいえば……移動してる？）









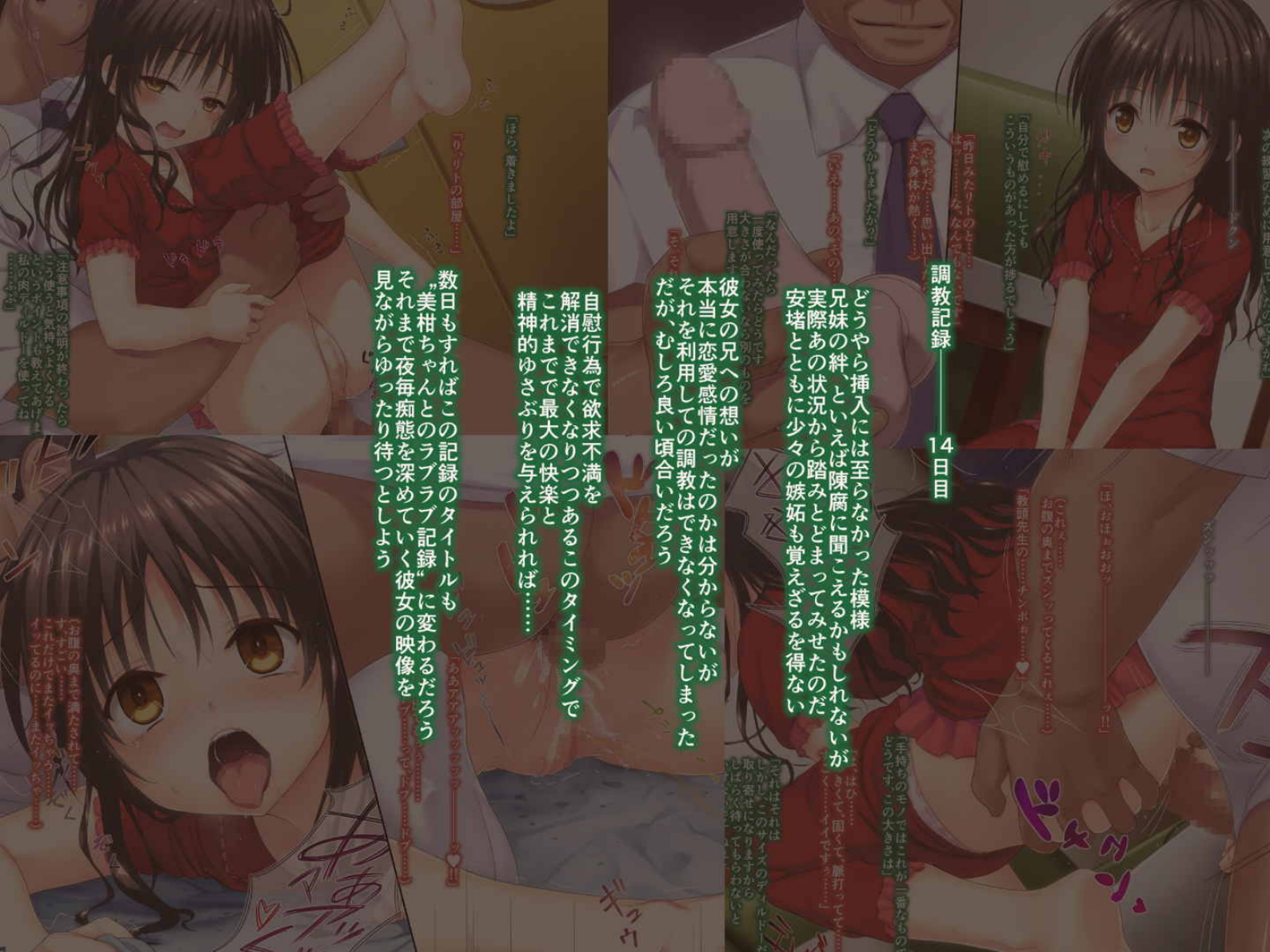
「ほら、着きましたよ」

「り、リトの部屋……」

「注意事項の説明が終わったら  
こう使うと気持ちよくなる  
というポイントも教えてあげますよ  
私の肉デイルドーを使ってね  
……ふふ」

「ゴクリ」

「ん」



「自分で雇めるにしても  
こういうものがあつた方が捗るでしょう」

### 調教記録 14日目

どうやら挿入には至らなかつた模様  
兄妹の絆、といえば陳腐に聞こえるかもしれないが  
実際あの状況から踏みとどまってみせたのだ  
安堵とともに少々の嫉妬も覚えざるを得ない

彼女の兄への想いが  
本当に恋愛感情だったのかは分からないが  
それを利用しての調教はできなくなりました  
だが、むしろ良い頃合いだろう

自慰行為で欲求不満を  
解消できなくなりつつあるこのタイミングで  
これまでで最大の快楽と  
精神的ゆさぶりを与えられれば……

数日もすればこの記録のタイトルも  
「美柑ちゃんとのラブラブ記録」に変わるだろう  
それまで夜毎痴態を深めていく彼女の映像を  
見ながらゆったり待とう

「ほ、おほおほおほ」  
「これ……」  
「お腫の奥までスソソッしてくるこれ……」

ドクッ

「手持ちのモノではこれが一番なもの  
とろですこの大きさは」

「それはそれは  
取り寄せたりしますから  
待つてもらわないと」

「ほら着きましたよ」

「リボットの部屋……」

「お腫の奥まで満たされて  
すっ……」  
「これだけじゃ足りないから  
イヤしてるのよ」

「お腫の奥まで満たされて  
すっ……」  
「これだけじゃ足りないから  
イヤしてるのよ」

「お腫の奥まで満たされて  
すっ……」  
「これだけじゃ足りないから  
イヤしてるのよ」

「お腫の奥まで満たされて  
すっ……」  
「これだけじゃ足りないから  
イヤしてるのよ」





「この角度で刺激するのもいいですよ」

「あ、またイクッ、あひッ  
ンンッ」

「それにしても  
お兄さんのチンポが私と同サイズとは  
親近感がわきますねえ……ふっん」

「はあッ……ああッ……ひんんッ！」

（違うから  
リトのよりおっきいからあ  
そんなにズボズボしないでえ！）

またイク

「こんなふう好きな人のベッドで  
好きな人と同じサイズのデイルドーを  
使ってオナニーできるなんて  
なかなか貴重なオナニーライフですよ」

（そう……だった……  
リトのベッドなのに  
リトの臭いがするのに  
言われるまで忘れてるくらい  
気持ちよくなっちゃうって……）

















「くくくく……」  
「特大サイズ」のデイルドーは  
届いたらお教えしますから  
それまでは今日持ってきていた  
「普通サイズ」のものを  
使ってくださいね」

「では、後日……また」

「べ、別にチンポが小さくたって  
兄には良いところがたくさん……」

「責めているわけではありませんよ  
安心したと言いたいです  
これでお兄さんへの想いも冷めるでしょうから  
気持よくなれそうもないチンポには、ね」

「そ、それは……」

「……ところで美柑さん  
実のところお兄さんのチンポは最初の  
デイルドーくらいだったんでしょ？」

「は、はい……  
すこかった……です  
今も、軽くイって……」

「中出しは堪能して  
もらえたようですね」

「びびび」

「はん」

「はっ」

「は」

「ん」

「ん」

「ん」

「ん」

「ぬ」

「ほん

「ん」

「ん」

「ん」

「ん」



数日後

「美柑ちゃん、具合悪いの？  
ここ何日か  
ぼーっとしてること多いし  
授業中にも、その……」

「う、うん  
ちょっと調子悪くて」

「保健室、一緒に行こうか？  
ほら、私につかまって……」

「ひゃんッ!？」

「ッ!？」

ほー

「だ、大丈夫、一人で行けるから」

「そ、そう……  
じゃ、行くね  
無理しちゃダメだよ？」

「うん、ありがと……」





「はあ……はあ……はあ……」

「美柑さん」

「は、はひえッ……!?」

「どうしたのです  
なんだか虚ろで怖いですよ」

「きよ……教頭先生……♡」

「それに顔も赤いですし」

「ひゃ……あひッ……ため  
せ、先生、肩……揉まない……で……」

モミッ

モミッ

モミッ

「そうそう  
例のモノね、届きましたよ  
ただ、学校に持ってくるわけにも  
いかないので……」

「あ、だめ……そんな  
廊下、なのに……  
あ、あああッ」

おどろ

ふふ

ふふ





「置いていってくれたデイルドーじゃ  
ぜんぜん満足できなくて……  
私、この数日、ずっとムラムラしてて……」

「ですから今日取り寄せたものを……」

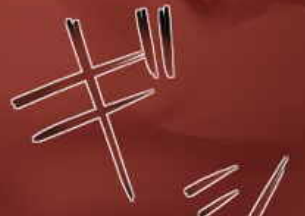
「デイルドーじゃ多分だめなんです  
オナニーじゃもう……」

「教頭先生いいましたよね  
もう兄への想いが  
冷めているだろうって」

「ええ」

ん。兄のことが嫌いに  
なったわけじゃないんです  
でもあのデイルドー……  
兄と同じサイズのデイルドーを  
使えば使うほど  
他の、もっと気持ちよくしてくれる  
おチンポが頭に浮かんで……  
でも、その人とは……」

「なるほど  
それが相談したかったことですか  
そうですね、例えば……」





「や、ヤミさん!?!」

「おや、お友達でしたか  
これは知り合いが撮ったものですがね」

『好きい……激しくされて  
子宮にチンポの先がめりこむくらいがイイい』

(ヤミさんがこんな顔するなんて……  
それに、えっちな言葉まで……  
相手は……あの校長先生!?)

「見てのとおり女性にとって  
たくましいチンポを受け入れるのは  
至上の喜びとでもいうもの」

(あ。あんなに大きいのが……  
出たり入ったり……)

「私はセックスから始まる恋があっても  
いいと思えますがねえ」

「私も……いいんでしょうか……  
たくましいチンポに恋しちゃっても  
セックスしたいって思っても」

!!

ドキ

はぐくみの  
♡

♡  
はぐくみの

ドキ

ドキ

ドキ





あ……♡

「あ……」

「いいんじゃないでしょうか」

（せ、背中に当たってる……私を気持ちよくしてくれるたくましいチンポ……）

「このおチンポで……ッक्सしたいです」

「ん、よく聞き取れませんがそれにアナルかオマンコかもちゃんと知らない」と

「わ、私……このおチンポでオマンコセックスしたいです」

セ  
セ

「くくく……、よろしいと言いたいところですが私はオマンコセックスは恋人としかしない主義なんですよねえ」

「あ……、服……」

グイ

ド  
イ  
イ  
ッ





あゝ服ゝ♡

私、教頭先生の恋人に  
だから……

「きっと、できますよ  
だから美柑さん……  
私の恋人になりませんか？」

~~~~~

あゝ

あゝ

「恋人ラブラブセックスがね  
一番気持ちいいんですよ……」

「い、一番……気持ちいい……」

「ええ  
相手の快楽欲求を尊重し  
互いに昂めあっていく……  
そういうセックスです」

「先生が私を気持ちよくするように  
私も先生を気持ちよく……  
で、できるでしょうか？」



(あああ……ぜ、全部脱がされちゃった)

「互いに裸で向き合うのは初めてですねえ  
やはり恋人同士の初セックスは  
こうでなくては  
それで、どうです？ 私のチンポは」

「お、おっきい……♡  
今までこれが  
私のお尻を気持ちよくしてたんだ」

ああー♡♡

ドキドキ

ぷる

ぷる

うん

ズ

ズ

「美柑ちゃんの身体も  
実に愛らしい……  
開きかけのつぼみのような  
途上の色気は  
正にあなたたちの年頃特有のもの  
たまりませんねえ」

「私の裸で、興奮して……その  
おっきくなってるんですか？」

「恋人の裸を見て勃起するのは当然です  
これを使って  
気持ちよくしてあげたいと思うのも、ね」

「う、嬉しい……」



「もう、オマンコ準備できてますから……」

「これはこれは  
とても男を知らないとは思えない  
発情マンコですわねえ  
まあ数日間ムラムラしっぱなしだったのでは  
無理ありませんが」  
ははは

「あ、おチンポ、ビクンビクンして……  
はあああ……  
今日、廊下で先生にイカされてから  
こうなること期待してたんです……きつと」

「替えてきたパンツもぐっしより  
でしたもんねえ……くくく」

「お願いします  
ここに……おチンポ入れて下さい♡」



ぽかっ

ぽっあ

トロリ

ゴク

びび

びび

びび

は





「あ、入り口が……ひ、広がって……」

「このキツさ  
初めての Anal セックスを思い出しますねえ  
今日は事故ではなく同意のもとですが」

「Anal も最初はキツかったけど  
すぐ気持ちよくなれちゃってえ……」

「年季が違いますからねえ  
さて、止めるなら今ですよ  
できることならお兄さんに  
捧げたかった処女でしょう」

「いいいんです……  
ほしんです  
私を気持ちよくしてくるデカチンポッ  
奥までくださいッ！  
お兄ちゃんじゃない恋人チンポおッ！」

「ではお望み通り  
奥まで「一気に」ッ！」

ズンッ

はッマッ

ズンッ  
ズンッ

グググ

ズンッ

ズンッ

ズンッ







「は、お、おチンポが……出て  
んんんいいいいッ」

（な、なにこれ、  
ひ、引っ掻き出される!?  
アナルセックスより  
内側を擦られる感じが強くて……）

「は、……あ……はひ……  
い、痛みもあるのに……  
それよりずっと、気持ちイイ……」

「ほら、見て下さい……  
チンポに初めての証がついてますよ」

「ああ……」

（そっか……もう私、処女じゃないんだ）

「今日は初めてづくしですからね  
初めて裸で向き合って  
初めてセックスして  
次の初めては……」

はっ

あ

んんん  
ッ  
ッ  
ッ

んんん

ヌボオ

んん

んん

んんん  
んんん

んんん  
んんん





「むぐぐ……」

（キス……初めてのキスう……  
す……こんな……舌が  
私の口……た、食べられてるみたいに）

「む……くちゅ……じゅりゅる……  
じゅば……むぐぐ……は……ぶちゅ……」

（寒い音してるう……  
こんな、ペロとペロが絡まって  
え、エッチすぎるよお……）

「ふはっ……  
ファーストキスにしては刺激的すぎましたかね」

「しゅご……キスすご……  
わたし……さっきから何度も……」

「ええ、小さくイッてますよね  
チンポが甘噛みされるみたい  
きゅんきゅんって締まるの  
分かりますよ……でも」

「ふはっ」

「むぐぐ」



「まだ最後の初めてが残ってますよ」

「あ、あひっ……ピストン……あひっ……ああッ」

「本当はもう少し優しくしたいんですが私もいつになく昂ってましてね情けないことに早く膣内射精したくてたまらないですよ」

(膣内射精……)

「美柑ちゃんも欲しいでしょう子宮めがけてピストンされて奥の奥に精液ドブドブ出されたいでしょ」

「はああああ……ほ、欲しいですう……」

(ああ……お尻に出されたときのこと思い出しちゃうあんなのオマンコで出されたらまた凄いいっちゃうよお)

ズツ  
ズツ  
ズツ

ニギ  
ニギ

ニギ  
ニギ

は  
は

は

あ  
あ

ビク  
ビク

ビク  
ビク

ビク  
ビク

ビク  
ビク

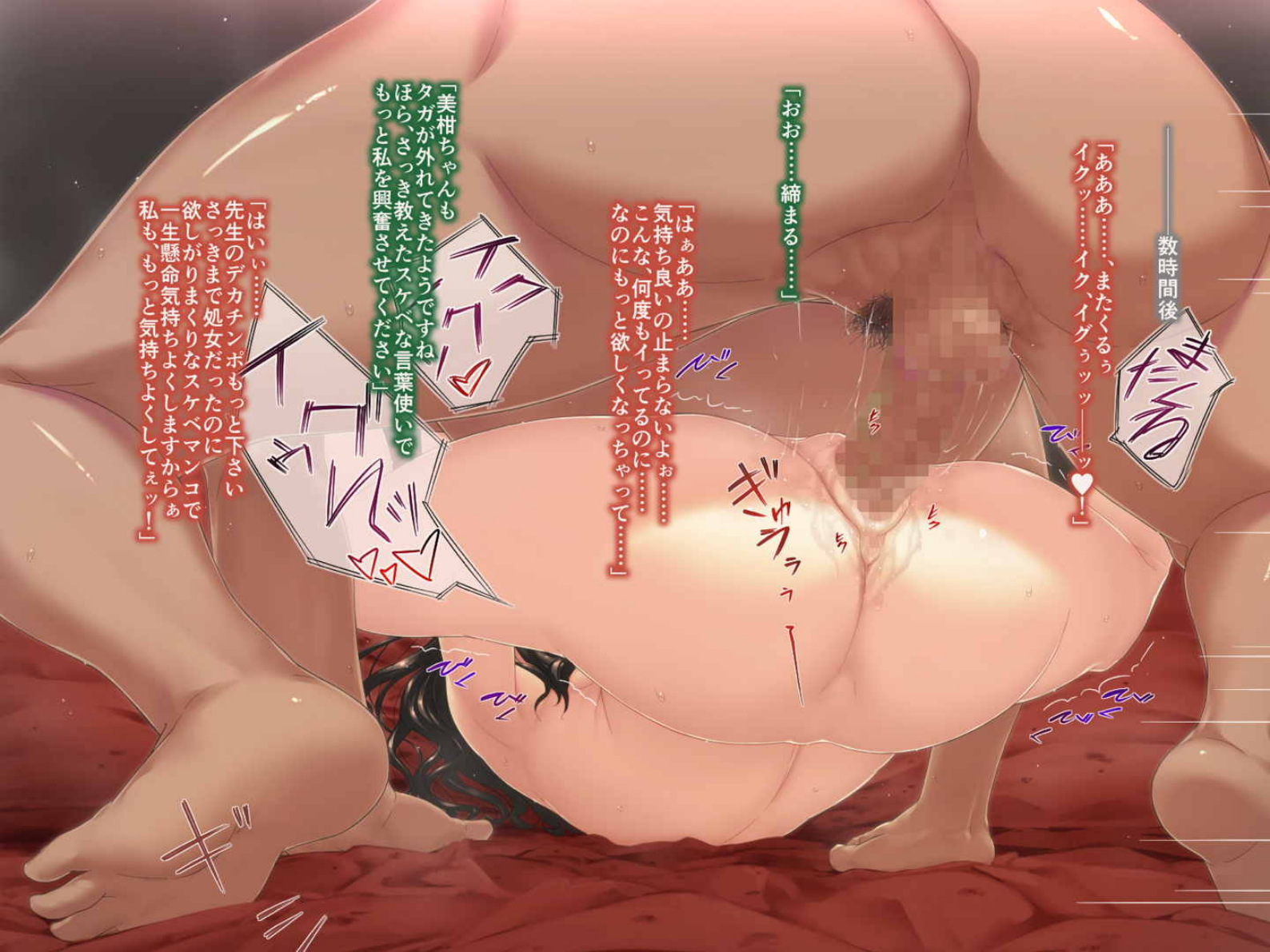
ニギ  
ニギ











数時間後

「あああ……、またくるう  
イクッ……イク、イグッラッッ」

「おお……締まる……」

「はあああ……  
気持ち良いの止まらないよお……  
こんな何度もイってるのに……  
なのにもっと欲しくなっちゃって……」

「美柑ちゃんも  
タガが外れてきたようですね  
ほら、さっき教えたスケベな言葉使いで  
もっと私を興奮させてください」

「はい……  
先生のデカチンボももっと下さい  
さっきまで処女だったのに  
欲しがりまくりなスケベマンコで  
一生懸命気持ちよくしますからあ  
私をもっと気持ちよくしてえッ！」

たかろ

たかろ

ギョッ  
クラッ

ッ

ッ

ッ

ッ





「それにこんな場所で男をくわえ込んでおねだりして……悪い子だねお兄ちゃんにあやまらないと」

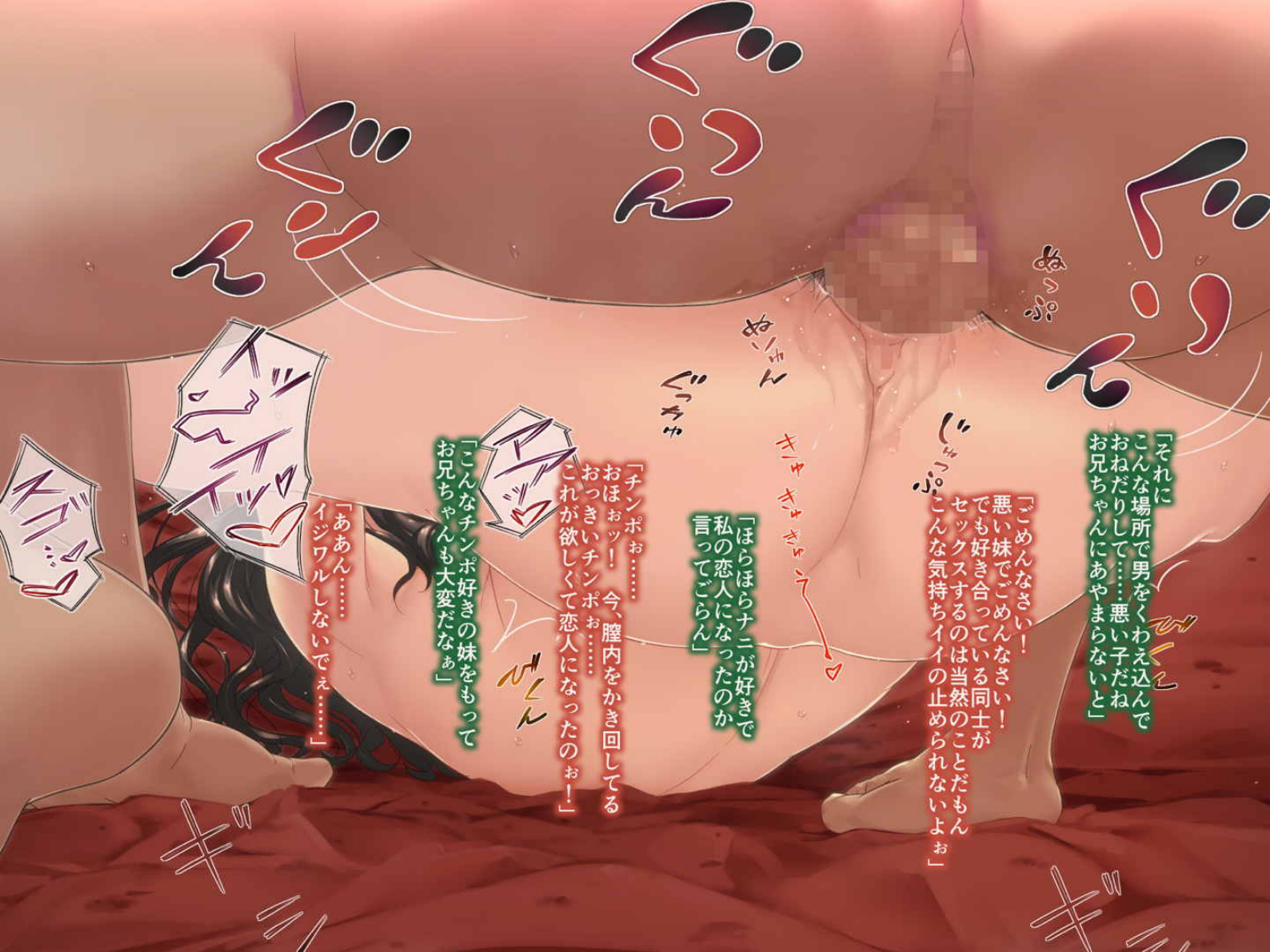
「ごめんなさい！悪い妹でごめんなさい！でも好き合っている同士がセックスするのは当然のことだもんこんな気持ちイイの止められないよお」

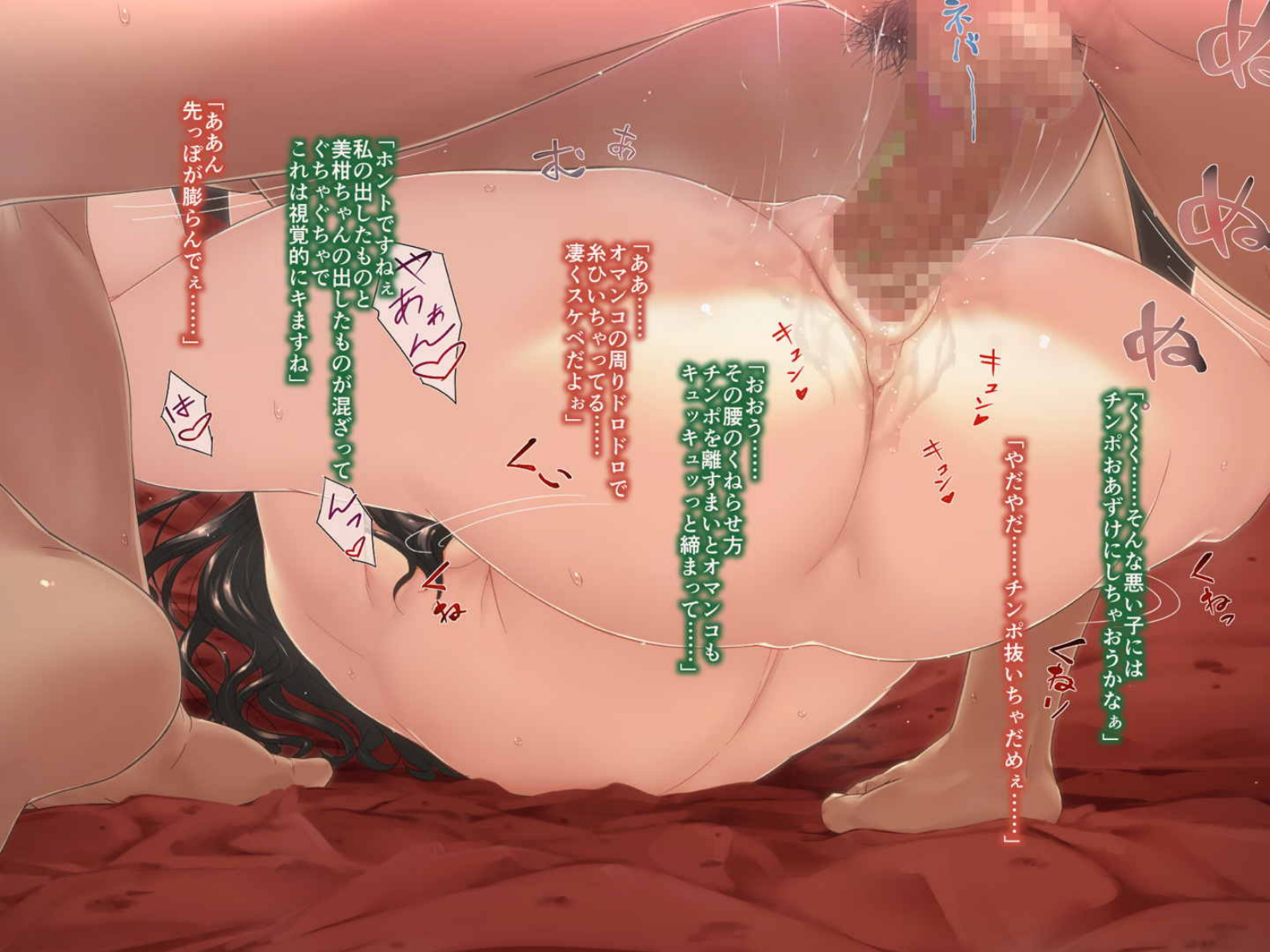
「ほらほらナニが好きで私の恋人になったのか言ってごらん」

「チンポお……おほおッ！今、膣内をかき回してるおつきいチンポお……これが欲しくて恋人になったのお！」

「こんなチンポ好きの妹をもつてお兄ちゃんも大変だなあ」

「ああん……イジワルしないでえ……」





ネバー

ぬ  
ぬ  
ぬ

「ぐくぐく……そんな悪い子には  
チンポおあずけにしちやおうかなあ」

「やだやだ……チンポ抜いちゃだめえ……」

「おおぅ……  
その腰のくねらせ方  
チンポを離すまいとオマンコも  
キュツキュツと締まって……」

「ああ……  
オマンコの周りドロドロで  
糸ひいちゃってる……  
妻くスケべだよお」

「ホントですなえ  
私の出したものと  
美柑ちゃんの出したものが混ざって  
ぐちゃぐちゃで  
これは視覚的にキますね」

「ああん  
先っぽが膨らんでえ……」

き

わん

ん

ぬ

キョん  
キョん

キョん

ぬ

ん

ん











あ♡

は♡

は♡

「これは、今日のところは  
コウチョウとの顔合わせだけに  
3Pや4Pは後日、  
ということにしましょうかね  
ふふふ……」

「ふえ……？」

「おやおや  
イキまくって朦朧としてるとはいえ  
ヤミちゃんがここに居ることに  
疑問を感じることもないとは」

「あ……ヤミさんだあ……  
どうしたんですかそんなところで  
こっちへきて  
一緒に気持ちよくなりましょうよ」

「ああ……美柑アナタまで……」

「抜かずの連続膣内射精も  
ここまででしょうかね  
ゲストも来たようですし」

「は……はひ……あ……  
やあん……まだ抜いちゃだめえ……」

はひ♡

ぬ♡

ぬ♡

ぬ♡

ぬ♡

ぬ♡

「女子たちは全員別の教室に移りましたか？  
それでは、保健の授業を始めましょうか」

「うわ、なんだあれじゃあ、もうここ教室なんだ……」  
（止まった……？）

（ああ……私、クラスの男子の前で  
おまんこ丸出しにしちやってる……）

「え、今日の授業では  
この模型を使って  
女性器ついて学んでいこうと思います  
皆さん近くまで来てもいいですよ」  
「女子のアソコってこんなになってんのか」

（なんて言ってるかはよく聞こえないけど  
ザワザワしてるのは伝わってくる……）

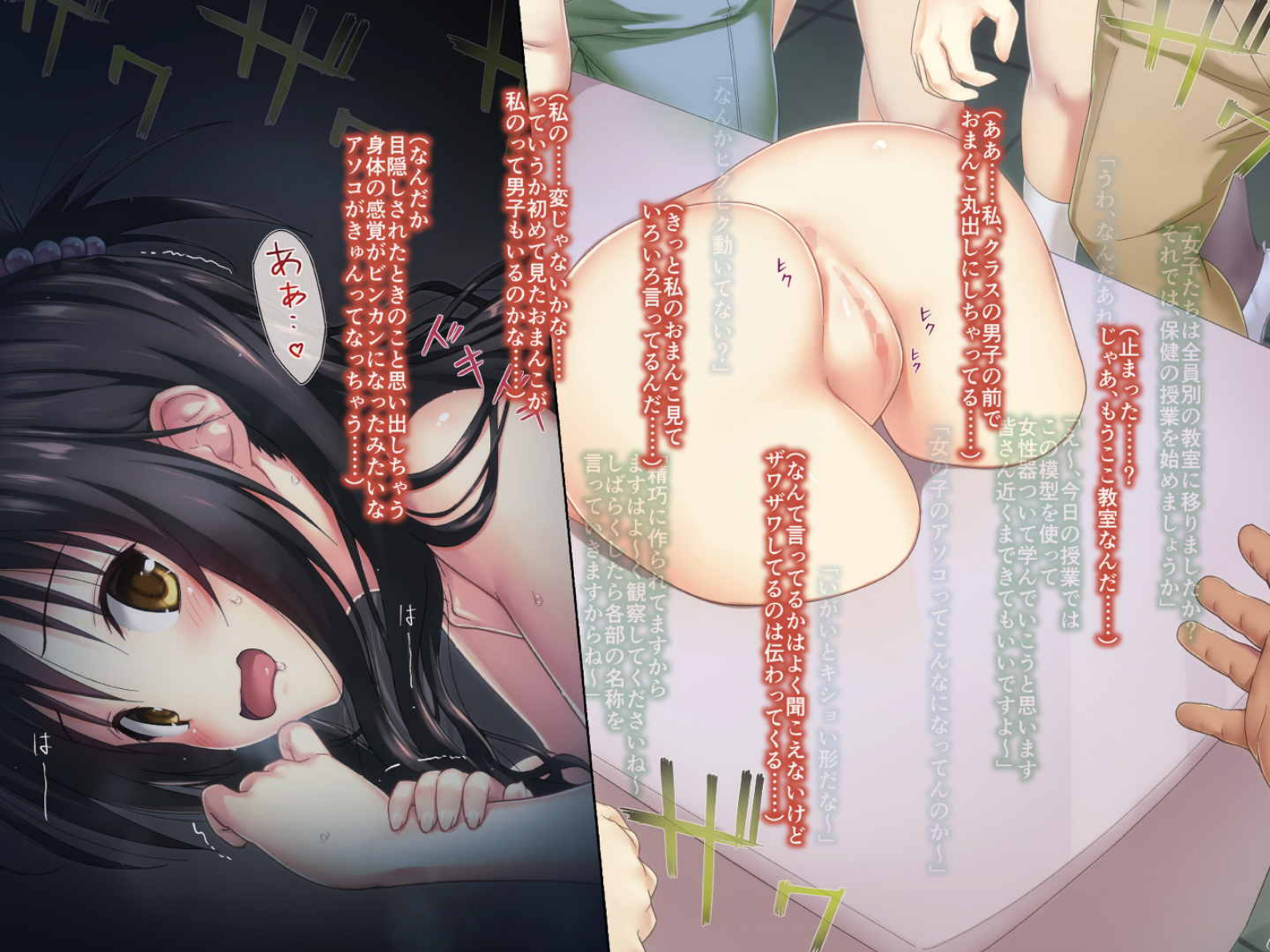
（精巧に作られていますから  
まずはよく観察してくださいね）  
（しばらくしたら各部の名称を  
言っていきますからね）

（きっと私のおまんこ見て  
いろいろ言ってるんだ……）

（私の……変じゃないかな……  
っというか初めて見たおまんこが  
私のおまんこもいるのかな……）

（なんだか  
目隠しされたときのこと思い出しちゃう  
身体感覚がピンカンになったみたいな  
アソコがきゅんってなっちゃう……）

ああ……♡





「……最後に、ここが膣口になります」  
(あつ……うん……ふあ……)

「女子はみんなこんなサイズの付いてるの……」  
(さつきから、ちよん、ちよん……ってこれ、指じゃないよね  
ひんやりして、細くて、固くて……  
もしかして指示棒……かな?)

「さういえば、結城さんが毎日のようにラブレターを買ってる噂は聞いたことがありますがおつとしてこのクラスにも……おつと、聞くべきではありませんねこれは」

「……」

「さういや保健の授業だもんね  
指示棒で指してその場所を解説……ってことは  
ひんツ……! いま、おまんこの入り口を  
突付かれたから……」

(みんなが、一斉に、”そこ”を見て……!)

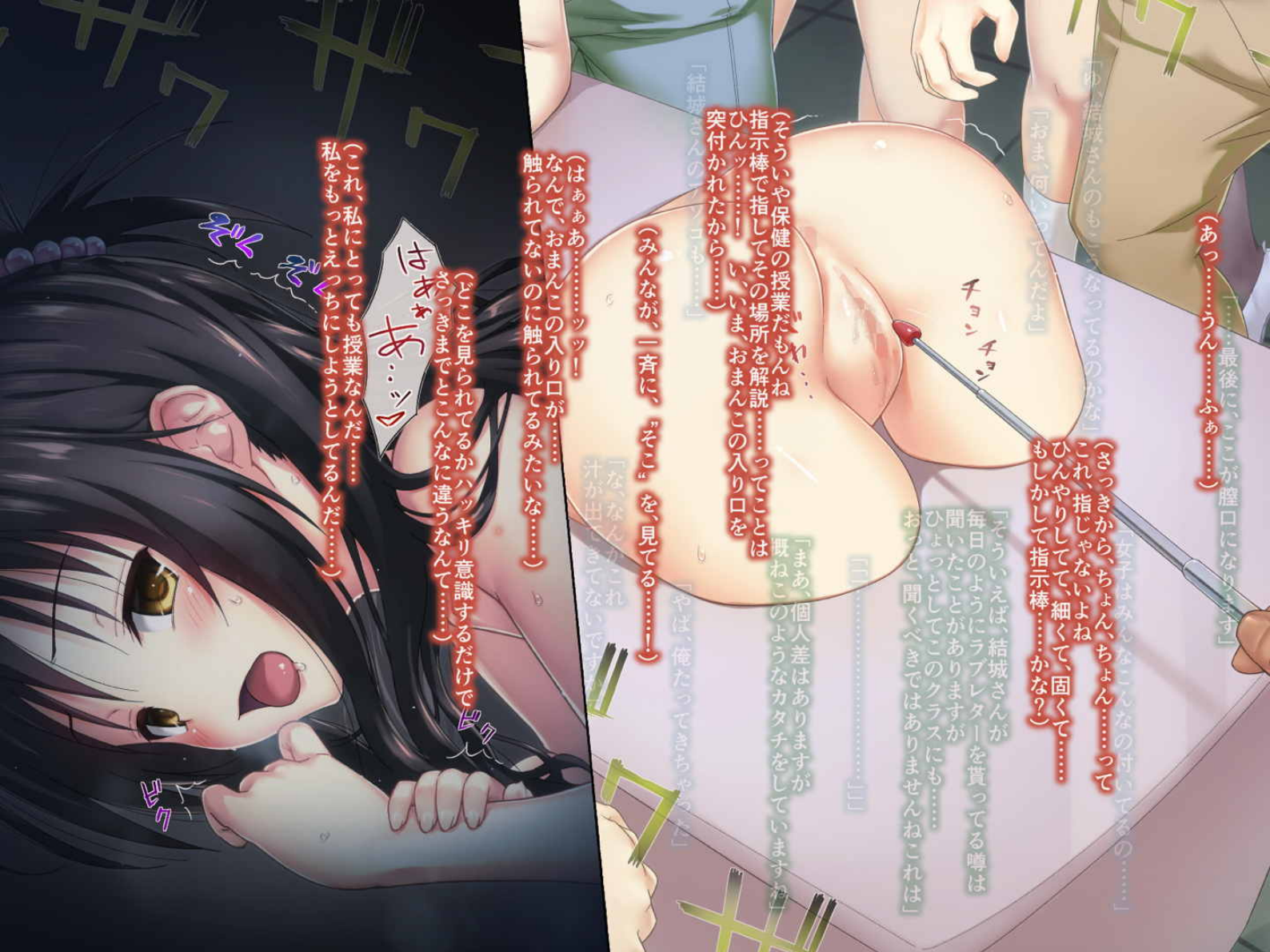
「な、なんのこれ  
汁が出さきてないです」  
「やば、俺たつてきちやあつ」

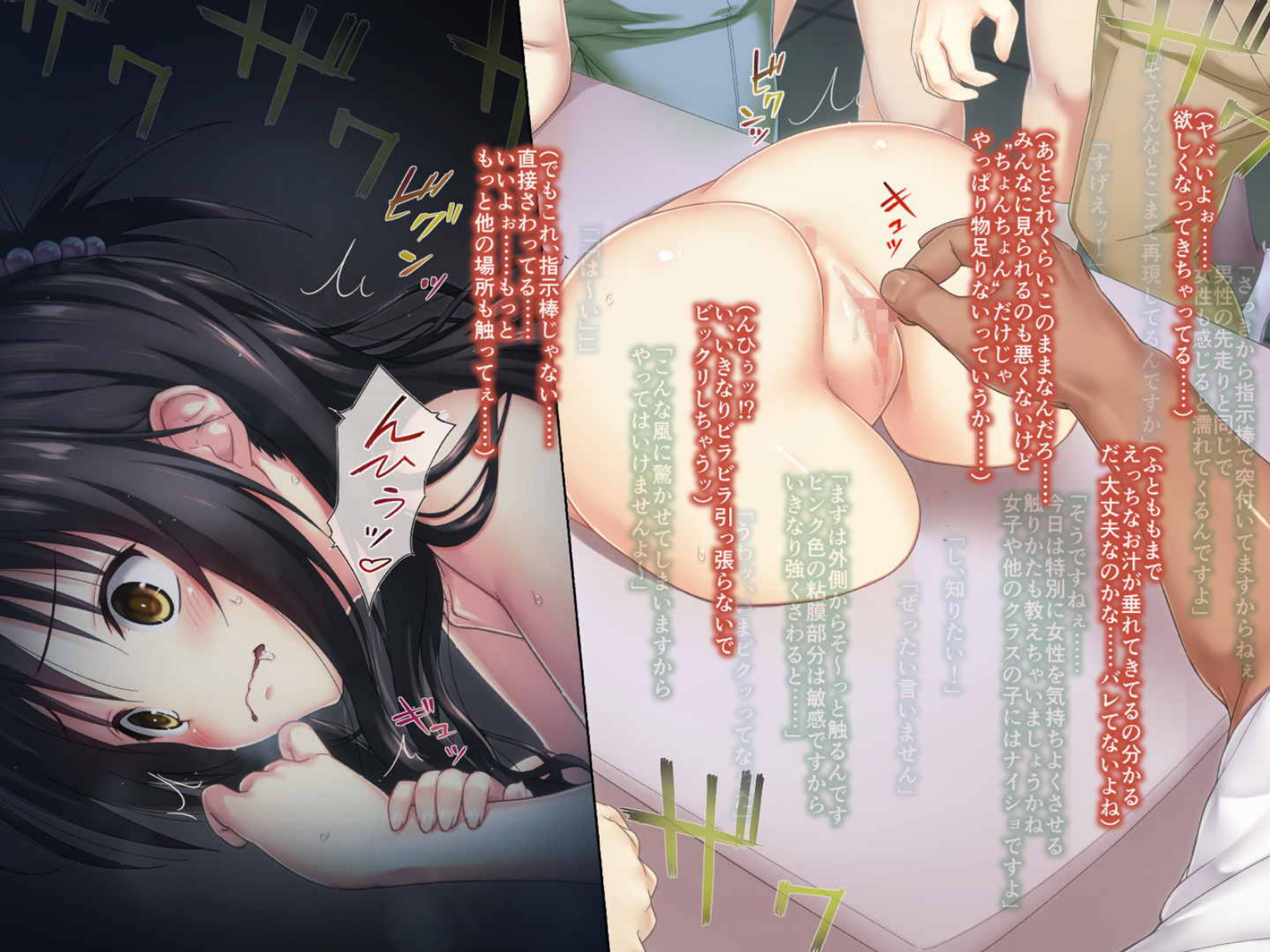
(はあああ……ツツ!  
なんで、おまんこの入り口が……  
触られてないのに触られてるみたいなの……)

(どこを見られてるかハッキリ意識するだけで  
さつきまでとこんなに違うなんて……)

(これ、私にとっても授業なんだ……  
私をもつとえつちしようとしてるんだ……)

はあ……あ……





「さっきから指示棒で突付いてますからねえ  
男性の先走りと同じで  
女性も感すると濡れてくるんですよ」  
「ヤバイよお……女性も感して濡れてくるんですよ」  
「欲しくなってきたらやってみて……」

「あとどれくらいこのままなんだろう……  
みんなに見られるのも悪くないけど  
“ちよんちよん”だけじゃ  
やっぱり物足りないっていうか……」

「ふとももまで  
えっちなお汁が垂れてきているの分かる  
だ、大丈夫なのかな……バレてないよね」

「……」

「ぜったい言いません」

「まずは外側からそーっとなで触るんです  
ピンク色の粘膜部分は敏感ですから  
いきなり強くさわると……」

「んひらッ!!  
いいいきなりビラビラ引っ張らないで  
ビクッしちゃうッ」

「こんな風に驚かせてしまいますから  
やっつてはいけませんよ」

「でもこれ、指示棒じゃない……  
直接さわってる……  
いいよお……もつと  
もつと他の場所も触ってえ……」

んひらッ♡

ビクッ

ビクッ

ビクッ











(ひゅっ……!!)  
もうすこし休ませ……ひんっ!!  
ち、違う……これ、教頭先生じゃない)

「お湯くらいかな……  
あと、ぬるぬるで、きゅっきゅっになる」

(ま、まさかクラスの男子?  
……くう……  
……すっごくきこえない……)

「爪を立てないように気をつけて  
指の腹の先の方で擦る感じですよ」

(こんなに違うんだ……  
……なんかつちまで緊張しちやいそう)

「グジュ……この……  
……膨らみがあったらそこを集中的に」

(あ……あれ?  
……な、なんで、急に、クリちゃんの裏側あ  
……そこだめ  
……せ、先生……私の感じるところ  
……お……教え……たなあ……あんっ)

(はあ……ふ……ん  
……力加減とかぜんぜんけど  
……さっきの余韻が残ってるから……)

(あ、き、きちやう……  
……クラスの男子に……い、イカされ……)

はあ♡  
ひん♡



「んんんんん」  
「おっ」

「イっちゃった……でも先生のときと、ぜんぜん違う……」  
「でも先生のときと、ぜんぜん違う……」  
「でも先生のときと、ぜんぜん違う……」  
「でも先生のときと、ぜんぜん違う……」

「よく頑張りましたね」  
「でも世の中にはいろいろな女性がいいますから」  
「彼女ができたなら、その娘特有の」  
「気持ちはよくわかるポイントを探してあげられる男になつてくださね」

「やった……けど、疲れたあ」

「ほら頑張ります！」

「まだ時間があるようですが」  
「他にやってみたい人はいますか」

「やっぱり大人のほうが……」  
「ううん……」  
「先生が上手いんだ」  
「私よりも私のカラダのこと知ってるみたいにしてくるもの……」

「きつといまも」  
「私が物足りないって思ってること分かって」  
「ひうっ……ッ!?」  
「ほらほら順番ですよ」  
「……」

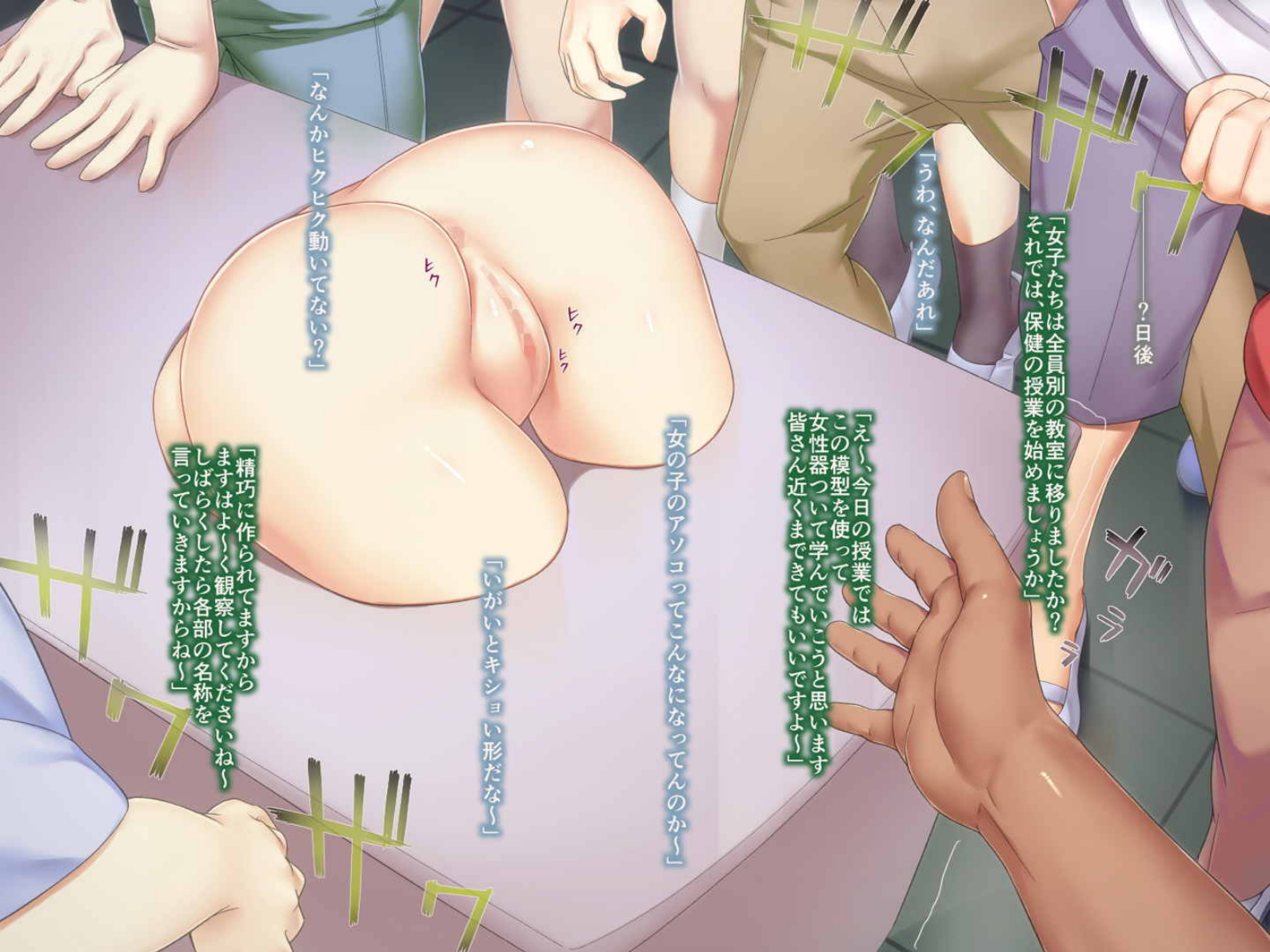
「やだ……これ、さっきと違う男子……？」  
「まさかこのまま」  
「クラスの男子全員がするの!?」

「あんな中途半端なイキかた……」  
「何回もしたらおかしくなっちゃう……」

「あ……やめ……や、あ、あ、あ……」  
「あ……」

「んっ♡」  
「んっ♡」





?日後

「女子たちは全員別の教室に移りましたか? それでは、保健の授業を始めましょうか」

「うわ、なんだあれ」

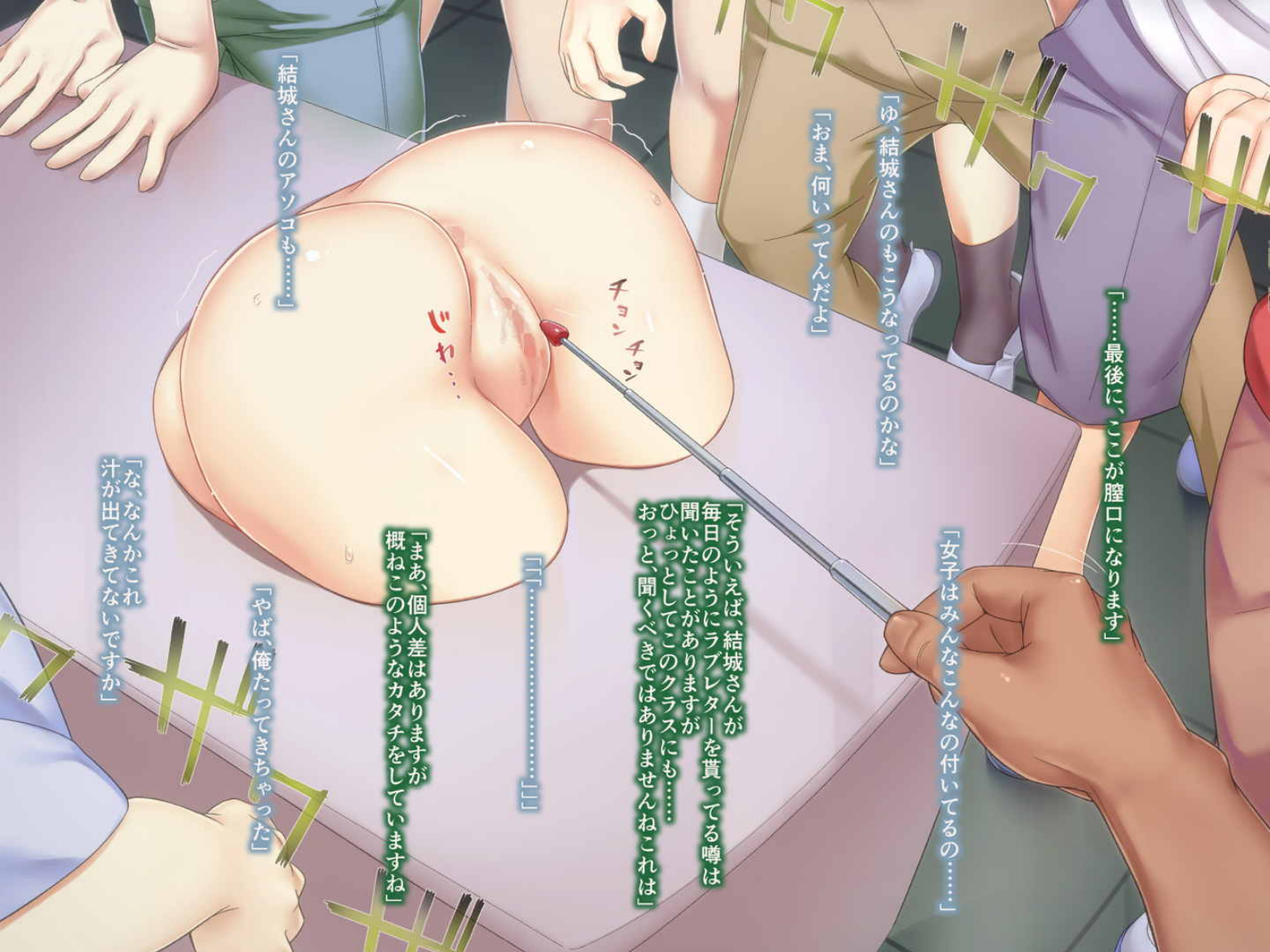
「え、今日の授業ではこの模型を使って女性器ついて学んでいこうと思います 皆さん近くまできてもいいですよ」

「女の子のアソコってこんなになってんのか」

「いがいとキシヨい形だな」

「なんかヒクヒク動いてない?」

「精巧に作られていますからまずはよく観察してくださいね。しばらくしたら各部の名称を言っていきますからね」



「結城さんのアソコも……」

「おま、何いってんだよ」

「ゆ、結城さんのもこうなってるのかな」

「……最後に、ここが膣口になります」

「女子はみんなこんなの付いてるの……」

「そついえば、結城さんが  
毎日のようにラブレターを貰ってる噂は  
聞いたことがありますか  
ひよつとしてこのクラスにも……  
おっと、聞くべきではありませんねこれは」

「……………」

「まあ、個人差はありますが  
概ねこのようなカタチをしていますね」

「やば、俺たつてきちやった」

「な、なんかこれ  
汁が出てきてないですか」



「さっきから指示棒で突付いてますからねえ  
男性の先走りと同じで  
女性も感じると濡れてくるんですよ」

「そ、そんなとこまで再現してるんですか」

「すげえッ！」

「そうですねえ……  
今日は特別に女性を気持ちよくさせる  
触りかたも教えちゃいましょうかね  
女子や他のクラスの子にはナイショですよ」

「し、知りたい！」

「ぜったい言いません」

「まずは外側からそーっと触るんです  
ピンク色の粘膜部分は敏感ですから  
いきなり強くさわると……」

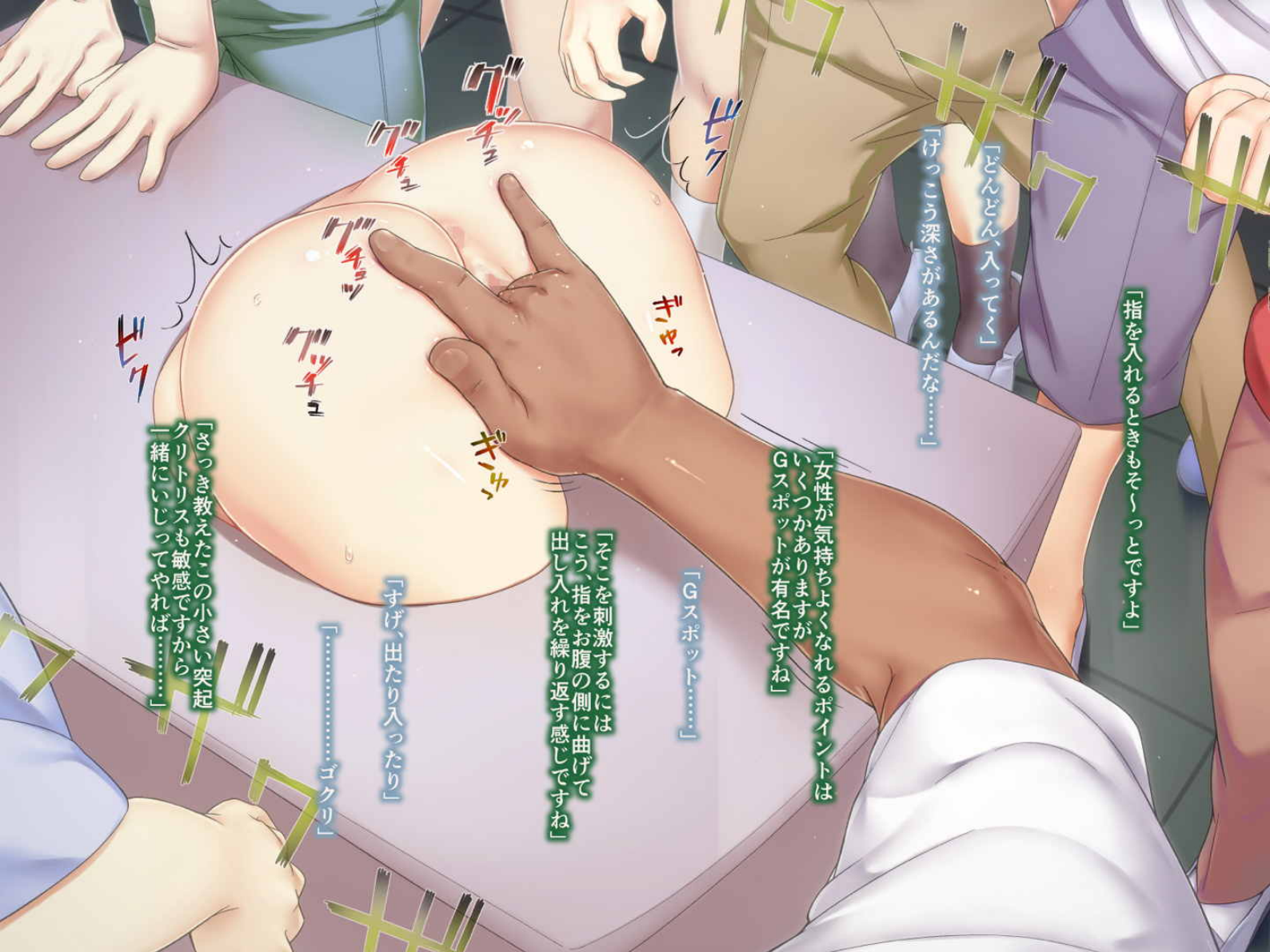
「うわッ、いまビクッってなった」

「こんな風に驚かせてしまいますから  
やっではいけませんよ」

「はーッ」

ビクッ

キョッ



「指を入れるときもそーつとですよ」

「どんどん、入ってく」

「けっこう深さがあるんだな……」

「女性が気持ちよくなれるポイントは  
いくつかありますが  
Gスポットが有名ですね」

「Gスポット……」

「そこを刺激するには  
こっ、指をお腹の側に曲げて  
出し入れを繰り返す感じですね」

「すげ、出たり入ったり」

「……………ゴクリ」

「さっき教えたこの小さい突起  
クリトリスも敏感ですから  
一緒にいじってやれば……」

ググ  
ググ

ググ  
ググ

ググ  
ググ

ググ  
ググ

ギョッ

ギョッ

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク

ヒク





「じゃあ、君  
君はちゃんと爪を切っていますからね  
爪が伸びていると引っ掻いて  
女性に痛い思いをさせてしまいます  
皆さんもちゃんとお手入れしましょうね」

「「はーん」」

「ツツ」

「「ッ!?!」

「はいはいはいッ……!」

「さて、試しにやってみたい人はいますか」

「おい、なんかこの箱、唸らなかった？」

「ええ、気のせいだよ」

「それは潮と違って  
まあ、諸説ありますが  
女性が気持ちよくなると出るものです  
ここまでできれば一人前ですね」

「うわ、なんか出た!」

「ツツ!」







「やりたいやりたい！」

「「おおー」」

ドクッ

「ほらほら順番ですよ  
くくく……」

「僕もしたいです！」

「まだ時間があるようですが  
他にやってみたい人はいますか」

「はい、頑張ります！」

「よく頑張りましたね  
でも世の中には  
いろいろな女性がいますから  
彼女ができたなら、その娘特有の  
気持ちよくなれるポイントを探  
なってくださいね」

「やったー……けど、疲れたあー」

ツッー

ドクッ

アツマ



「いや、実に充実した授業ができました  
一度ああいう実践的な性教育を  
してみたかったんですよねえ  
美柑ちゃんには感謝してますよ」



「酷いですよ教頭先生  
保健の授業を手伝ってほしいって  
言うから私……  
あんなえっちな授業だつて知ってたら」

「でもいろいろと発見もあったでしょう」

「それは……  
男子たちの私をイかせようっていう  
必死さは可愛かったですけど……  
でもやっぱり物足りなくて」

「十分感じていたようにも見えましたが」

「もう、分かっているくせに……」

「ふふふ、あのあとすぐに  
激しく求めてきたときはちょっと驚きましたよ  
交換条件のこともすっかり忘れてたでしょう」

「忘れてたわけじゃないんですけど……」

「確かこのファイルだったかな……」





あは♡

「私好みなのはあ……  
テクも持っていて、それに  
この、パンツ越しでも分かる

「はは、これは手厳しい」

「当たり前かもしれないんですけど  
みんなそんなに大きくないんですね  
それに、テクニクがあれじゃ……」

「それでどうです  
同級生の勃起したチンポが  
どれくらい大きいか見たいと言うから  
撮ってきたわけですが」

「あんなに物欲しそうなマンコが目の前であれば  
反応してしまうのは無理からぬことですよ」

「あは……、みんな勃起してる」



「でっかいおチンポかなあ  
はああ♥改めて見るとやっぱり大きい……」

スリッパ

「それは光栄ですなあ  
やはり恋人としては  
美柑ちゃんを一番気持ちよくさせられる  
チンポでありたいですからね」

「嬉しい……でも、媚薬を使ったこと  
まだ許したわけじゃないですからね」

「キクリ……」

「いや、話すにはまだ早かったですでしょうかね」

「これからも  
もっと気持ちいいこと教えてくれたら  
許してあげないこともないですよ」

「くくく、それはもう  
許しているのと同じことですよ  
本当に美柑ちゃんは欲しがりやさんですねえ  
すりすり……」

はああ♥

「あああん♥」

きゅん♥

「あ、お話し中すみませんが……」



「あれ？ コウチヨウさん来てたんですか  
今、恋人同士のイチャラブブートーク中なんで  
邪魔しないでねえますか」

「そんなあ、今日は美柑ちゃんと  
3Pできるっていうからきたのに……」

「そこまで情けない顔しなくても……」

「こないだは美柑ちゃんが失神してしまって  
混ざれませんでしたから  
楽しみにしてたんですよ」

「ヤミさんは一緒じゃないんですね」

「ええ  
わし達くらいラブラブだと  
会えない時間が愛を育てたりするんですよ」

「そんなこと言って  
またえつちなこと考えてるんでしょう」

「あ、どうでしょう」

ん  
ん  
♡





「あはあ……  
こんな凄い二本も相手したら  
私おかしくなっちゃうかも……」

「キョウトウとの約束で  
美柑ちゃんのおまんこには入れられませんかね  
それ以外は堪能させてもらいますよ」

「うわ、校長先生のおおっきい……  
これがヤミさんの膣内に  
いつも挿入してるんだあ……」

「ではわしも混ぜてもらいましょうかね」

クワン

クワン

ズ  
ズ

「んん……じゅっ……  
ぷは……くちゅ  
じゅぽっ……んん……  
れる……うん……」

「おお……、いいですよ……  
美柑ちゃんの小さなお口で……  
それにひよつとこ  
パキニュームフェラとは……」

「んふ……先生かわいい……  
じゅっぽっ……  
じゅぽぽ……れる……じゅば……」

「うほ……その舌使い  
棒アイスで練習してるでしょう  
お友達が側にいるときは  
控えたほうがいいですよ  
引かれちゃいますからね  
くくく……」

「も……それじゃまるで  
私が普段からおチンポのことばかり  
考えてるドスケベみたいじゃ  
ないですか」

「でも、実際そうでしょ」

「じゅるるるる  
（そ……です♡）」

「う……ドスケベ最高」

「美柑ちゃん  
わしもっ、わしもっ……」

「も……しょうがないですねえ」

美柑ちゃん  
わしもっ、わしもっ……



「ん……んぐ……じゅるっ……ちゅば  
じゅるる……れろ……あふ……  
ふはっ……やっぱりおっき……」

「これは……いやはや……おうっ  
ヤミちゃんに負けるとも劣らない  
素晴らしいフェラチオです  
ところでその格好は……」

「これはあ……  
最近、気に入ってるエロメイドコスです  
これを着るとオチンポ奉仕にも  
気持ちが入るんですよ」

「素晴らしい  
美柑ちゃんは内も外も  
チンポ奉仕の精神があふれてますな」

「お褒めにあずかり光栄にございます  
ご主人様……なんちゃって」

「おふ……これはたまらん」

「くっ、こちらも手だけじゃなくて  
口でお願いします」

じゅ  
ぽ

ちゅ  
ぽ

い  
る  
や





じゅぽっ  
じゅぽっ  
じゅぽっ

「本当にしようがない  
おチンポさんたちですねえ  
ん、じゅぽっ……ちゅっ  
じゅぽっ……れる……っ  
じゅぽっ……じゅるる……」

「んっ……おおッ  
私としたことが……  
もうイキそうです」

「わ、わしもですよ……  
一度出しておきましょうか」

「その方がオマンコするときも  
長持ちするかもしれませんね  
じゃあ、美柑ちゃん……」

「は……  
じゅぽ……じゅるる……じゅぽ  
ほら二人ともイッて  
れる……ちゅっ……じゅるる……  
濃いドロドロの  
ザーメンいっぱいだして  
私にぶっかけてえッ♥」

「くおおおおッ」

「おおおおおおッ」

ぞぞぞ













「チンポを楽しむのもいいですが腕の数も二倍ですからね  
こういうことも……」

「はひっ……ふぁ……ッ  
ああああ、おっぱいも、クリちゃんもお  
気持ちいいとこ全部触られてる……ッ」

「油断して緩んでそうなのを  
狙って……ほらほらほら」

「だめえ……ッ  
またそんな、イグ……イグイグウッ！」

「背筋をそらしたら  
今度はお腹のほうを……撫で撫で」

「んんんんッ  
はあ……はあ……はあ……  
身体があ……勝手に跳ねちやうッ！」

「なのに  
私たちのチンポを離すまいと  
ぐいぐい締め付ける食欲さといったら」







「つまりもつと気持ちよくしてっていう  
意思表示でしょう」

「ンハイイッ  
ほ、本気ピストンだめッッ！  
違うから、それ勝手に締まってるだけだから  
私もう、どこが気持ち良いのか分かってないからあ」

「全身くまなく性感帯になってるだけですよ」

「「だけ」ってなんですかあッ  
ンハイイッ、目の前がチカチカするうう……」

「あとは奥の奥に仕上げの一発を……」

「ああああ……ッ  
チ、チンポ膨らんできてるの分かるう……♡  
射精するの？ 同時にキチャうの？  
それヤバいからあ……妻いのキチャうからあ  
せ、せめて別々に……」

「何いってるんです」

「ねえ」







「だ、だめこれ……  
しばらくイキっぱなしで……  
も、戻ってこれるかなあ……わたし」

「何言ってるんです  
とっくに戻れないとこまで来てるでしょ」

「あ、あは……そうかも……」

は

あは、は♡

んん

は

ぷる

ぷる

「一人分の精液ですからねえ  
まだまだ奥に残ってるはずですよ  
ちよっと力んでみてくださいよ」

「い、ごめんなさい……  
でもこれ、力はいらなくて……」

「では手伝ってあげましょう」

ぎゅっ

ぷる







「そうになったらそうだったので  
それを楽しめるよう教育してあげますよ  
私の恋人に相応しいスケベになるように、ね」

チュッ♡



クイッ

「ふあい……  
私も負けないくらい  
このおチンポに奉仕しますからあ  
もーっと恋人セックスしてくださいね♡」

「こんな風に↓されちゃう話 その2」

おわり

